本 編

～もっと知りたい！！「いいなぁ 安心まちづくりワークショップ」～

第１ ワークショップについて

１ 進 行

はじめに、全体進行役の杉崎委員からワークショップの進め方などについて、オリエンテーションを行い、その後席替えを挟んで２回グループ活動が行われた。

グループ活動では、事前アンケートをもとに４分科会（テーマ）・16 テーブルに別れて、それぞれ自己紹介や意見交換が行われた。休憩をはさんで再度席替えを行い、グループ内でワークショップに参加した感想等が発表された。そのうち４人の代表者が全体に向けて自らの感想等を発表、小出委員長から講評をいただいた。最後に参加者一人ひとりが葉っぱ形の付箋に今後の抱負や意気込みを書いて「いいなぁ 安心の樹」を作成した。

① オリエンテーション

話し合いのルールや分科会のテーマ設定、席替えなどワークショップの進め方について説明した。

② グループ活動（１回目）

当初のテーブルは事前アンケートをもとに事務局が指定。自己紹介の後、テーマ別意見交換を行った。

自己紹介（一人１分）は、氏名、地域、日頃の活動概要を紹介。

意見交換（27 分）では現在抱えている課題、課題解決に向けた成功事例や失敗事例などを語り合い、情報共有した。

グループ活動の感想をレポートへ記載した。

③ グループ活動（２回目）

興味のあるテーマの分科会への席替えを促した。その後はグループ活動（１回目）と同様。

④ グループ発表

誕生日月（季節単位）で席替えを行った。

氏名や地域を紹介した後、今後の活動の参考になった話や感想についてグループ内でそれぞれが発表した。

⑤ 全体発表

４名から参加した感想等について発表があった。

参加者一人ひとりが葉っぱ形の付箋に、今後の抱負や意気込みを書いて「いいなぁ 安心の樹」を作成

いいなぁ 安心の樹

2 分科会

分科会では、図１のとおり「内容の充実」、「参加者の拡大」、「行政や警察との連携」、「学校・ＰＴＡとの連携」をテーマとして、意見交換が行われた。

活動内容の充実

○既存の活動のレベルアップ
○新しい活動の企画・実施に向けた取組方法
○地域の課題解決に向けた検討手法
○社会的防犯事案に対する問題意識の共有と、ボランティア活動への反映
○防災活動との連携
○交通安全活動との連携
など

～ 青色のテーブル

参加者の拡大

○メンバーの高齢化に伴う団体の維持・継続
○青年・壮年世代への働きかけ
○ボランティア活動未経験の高齢者への働きかけ
○防犯ボランティア団体と学生ボランティアとの連携
○参加者拡大に向けたイベントの企画・開催
など

～ ピンクのテーブル

行政や警察との連携

○地元の区市町村や警察署への相談・働きかけ方
○防犯活動関連の補助金情報（東京都、区市町村ほか）
○行政や警察との上手な連携の仕方
○行政や警察への各種申請手続き
○地域の防犯情報の取得
○防犯講和の講師派遣
など

～ 緑色のテーブル ～

学校・PTAとの連携

○地域と学校の関わり
○地域活動へのPTAや子供の参加呼びかけ
○具体的な子供の見守り方法
のほか、
○防犯ボランティア団体と学校との連携
○防犯ボランティア団体と町会や自治会、商店会との連携
○町会と町会の連携
など

～ 黄色のテーブル ～

3 参加者アンケート（抜粋）

本アンケートはワークショップ参加者（101 名）に配付し、回収できた 87 票を有効票として集計した。グラフに記した(N＝87)は､回答者の合計数を示している。このため単純回答の場合、回答個数の合計は 87 となるが、複数回答の場合、１人が複数個選択するため、回答個数の合計は 87 を超える。複数回答における占有率（%）は、回答個数を回答者総数 87 で除した値としている。

なお、(　) で囲んである数字は回答個数を表している。

(1) 加入している主な活動母体

加入している主な活動母体は、「町会・自治会」(39.1%）が最も多く、次いで「防犯協会」(37.9%)、「学生ボランティア」(23.0%）となっている（図 2)。

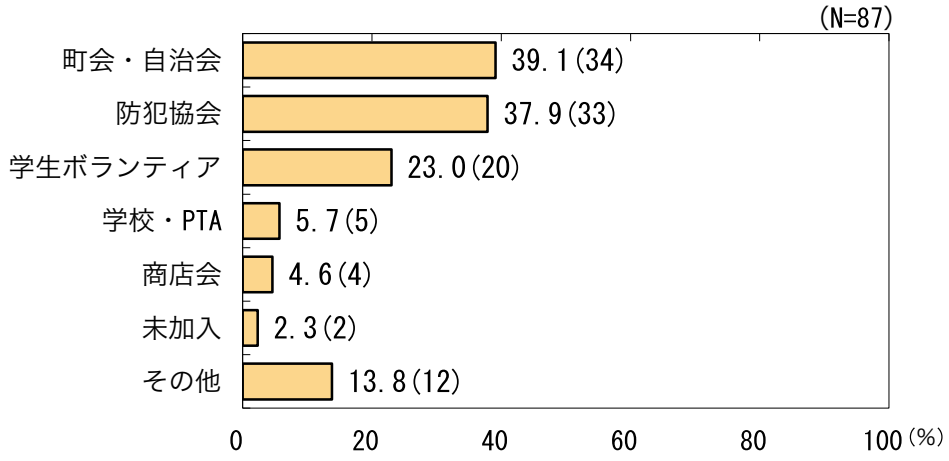

図２　加入している主な活動母体（複数回答）

(2) 防犯活動の取組年数

犯活動の取組年数は、「15 年以上」(20.7%）が最も多く、「10 ～ 15 年未満」を合わせた防犯活動 10 年以上が、回答者の約 1 / 3 （34.5%）を占めている（図 3)。

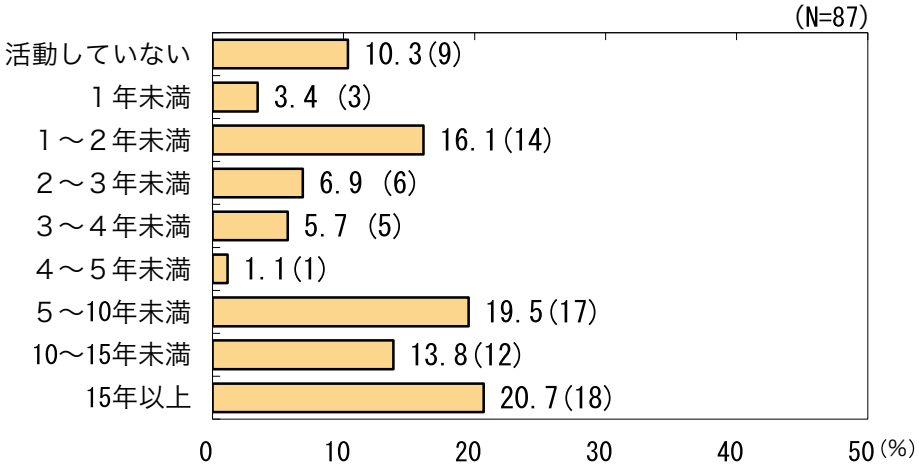

図３ 防犯活動の取組年数

(3) 平均的な活動日数

平均的な活動日数は、「週に３日程度」（18.4%）が最も多く、次いで「月に１日」（17.2%）、「週に１日程度」（16.1%）となっている（図４）。

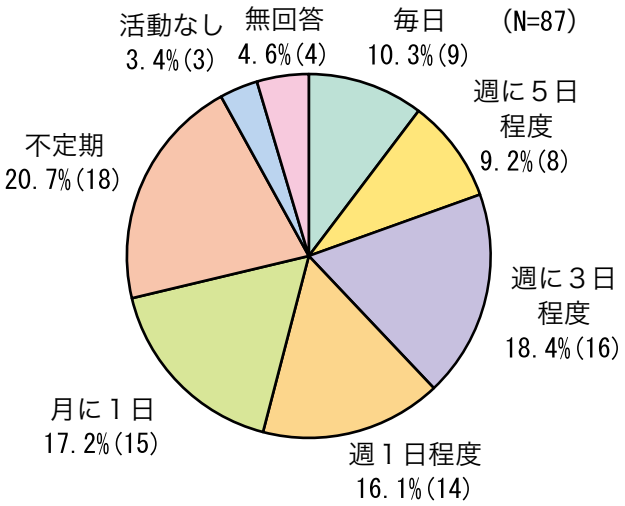

図４　平均的な活動日数

(4) 主な活動内容

主な活動内容は、「防犯パトロール」（69.0%）が最も多く、次いで「子供の安全確保（保護・誘導・見守り）」（36.8%）、「環境浄化活動（落書き対策・清掃活動など）」（27.6%）、「青少年の健全育成」（20.7%）となっている（図５）。

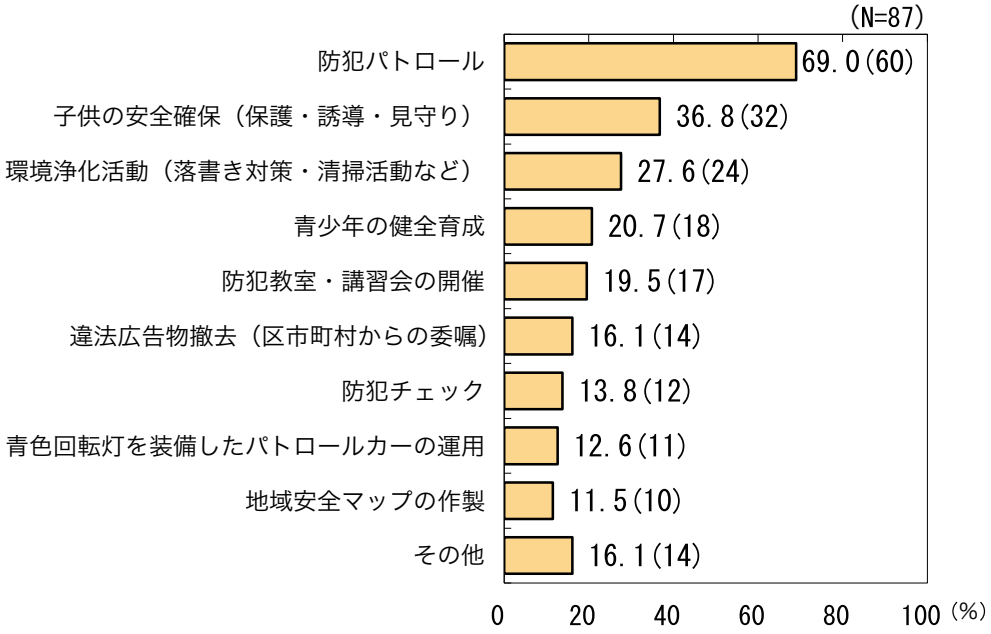

図５　主な活動内容（複数回答）

(5) 活動上の課題

活動上の課題は、「町会・自治会との連携」（41.4%）が最も多く、次いで「警察との連携」（39.1%）、「学校・ＰＴＡとの連携」（29.9%）、「仲間づくり」「構成員の高齢化」（ともに26.4%）、「行政との連携」（23.0%）となっている（図６）。

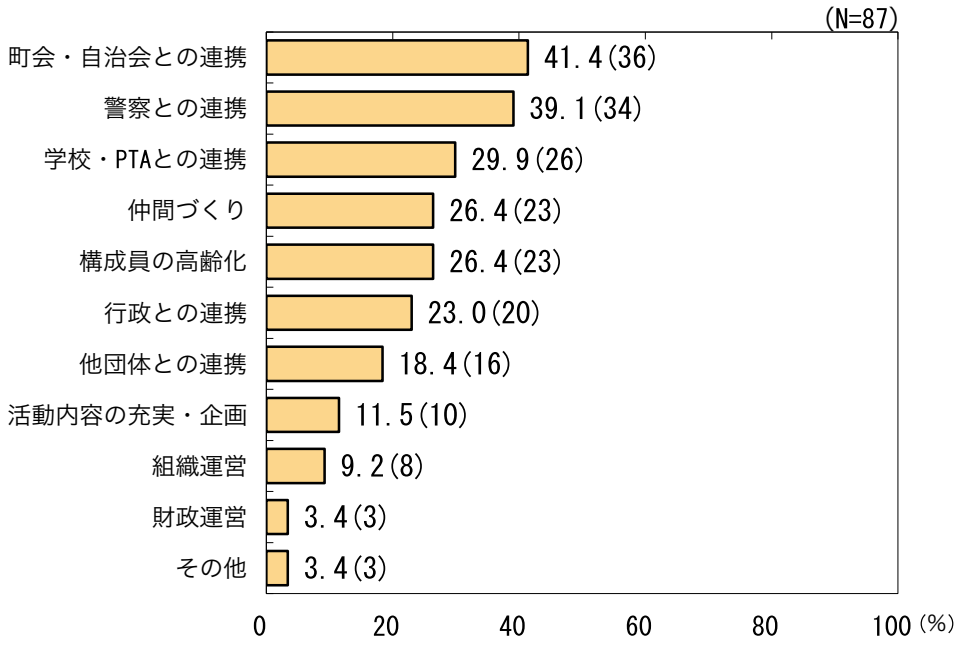

図６　活動上の課題（複数回答）

(6) ワークショップに参加した感想

○ ワークショップに参加した感想は、「とても参考になった」と「参考となった」を合わせると 82.7%となっている（図７）。

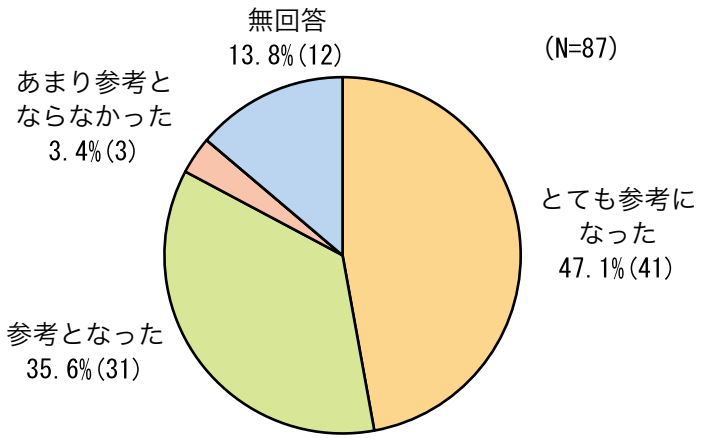

図７　ワークショップに参加した感想

○ 主な感想は以下のとおり。

・いろいろな話を聞くことができた。
・様々な活動団体の問題点や内容を聞くことができ、参考・勉強になった。
・これからの活動に関心が出た。
・他地域の活動内容を地元への活動に取り入れたい。
・若いボランティアが積極的に参加していることに驚きを感じた。
・自分達以外にもボランティアで防犯活動をしている人がいることを知り勇気が出た。
・単純に交流にもなった。
・いろいろな案を手に入れることができた。
・時間が足りず、充分に聞きたい部分を掘り下げることが難しかった。
・ファシリテーターを１つのテーブルに一人つけてほしかった。
・自分達の問題とマッチするテーマがなく、議論がかみ合わなかった。

(7) 席替えの感想

○ 席替えの感想は、「とても良かった」が 70.1％となっている（図８）。

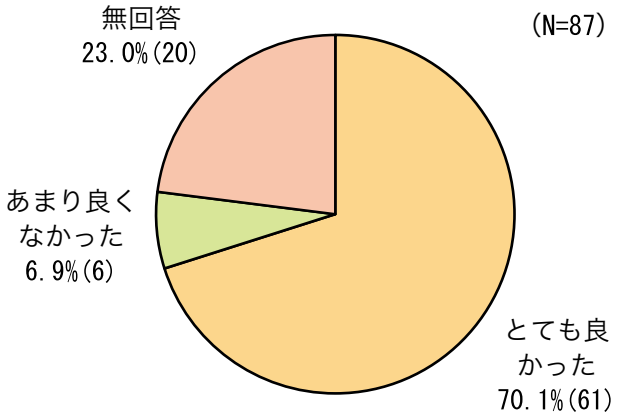

図８　席替えの感想

○ 主な感想は以下のとおり。

・いろいろな意見を聞くことができた。
・繰り返して話すことで、参加者がオープンになってきた。
・様々な人と交流することができて良かった。
・時間が足りずに、テーマを決めてじっくり話ができるようにしてほしい。
・バタバタとして落ち着かない。　　等

第2 グループ意見交換要旨

1 第1分科会（活動内容の充実）

（パトロール）

○ 週３回（月水金）、メンバーが集まりやすい時間帯の午前 11 時から昼まで、健康のためにパトロール活動をやっている。

○ 友達づくり、地域のコミュニケーションづくり、ゴミ拾いなど美化運動も兼ねたパトロール活動を行っている。

○ ４日間行う年末パトロールでは、連日 30 人以上が参加している。若い親子も参加し、子供には 500 円の図書券をあげている。

○ 六本木繁華街のパトロールを週１回、夜７時から８時までと、２週間に１回、通学路で朝７時半から８時半まで行っている。地元住民のみならず、企業も参加している。

○ 夜のパトロールは午後９時から週に１回行っている。週ごとに曜日をずらし、雨が降ったら中止している。

○ 町内の人達にもわかるように、拍子木を叩きながらパトロールしている。火の用心もかねて、夏でも冬でも叩いている。音を出すのは効果的である。

○ パトロール活動中、いろいろな方と話ができるのが良い。

○ パトロール中、小学生に「５時だから帰りましょう。」と声をかけている。

○ ルートを変えてパトロールすると「こんな所に空き家があった。」と発見することがある。できるだけこまめに地域をパトロールしたい。

○ 町会では、青少年対策委員とＰＴＡ校外委員と婦人防犯部の三者でパトロールをしている。子供達のために夕方５時から６時まで、町会のために夜９時から 10 時までやっている。

○ ３年前老人会に入り、元気な方が家の中にじっとしているのは良くない、「老人を外に出そう。」と思いパトロール隊を結成した。

○ 町会で防犯活動を始めた。30 人位を月～金の曜日ごとに５つに分けている。休日と雨の日はやらない。参加メンバーは自由だが、３人揃ったらスタート。２人だったら止める。

○ 私達がボランティア活動に参加する魅力を作らなければいけない。

○ 登校中の子供達にあいさつしながら見守り活動することは、若返り方法の一つである。

○ 月報を毎回活動グループごとに作り町会長に報告している。

（見守り）

○ 品川区では、83 運動（子どもの登下校を見守る運動）推進委員会に予算を付けて、公立小学校に入学した１年生の保護者に防犯ジャケットやシールなどを渡している。

○ ＰＴＡから品川区内の商店街に対して「買い物時間帯に、子どもを見守って欲しい。」などと働きかけている。

○ 20 日に１回程度、子供の見守り活動として、子供達を並ばせて学校へ連れて行く。そのとき、子供は整然と歩かず分散するので大変である。

○ 子供見守りボランティアと防犯委員をやって良かったことは二つある。一つは、子供見守りは登下校の時間に合わせなければいけないので、生活が規則正しくなった。もう一つは、地域のお母さん達と顔見知りになり溶け込めたこと。

（チラシ配布）

○ パンフレットは、相手の顔を見ながら渡すと受け取ってもらいやすい。

○ 商店街の活性化を進める中で防犯の意識も高めていく。例えば、買い物袋を商店街で作り、その中に防犯のチラシを入れてはどうか。

○ 振り込め詐欺防止のチラシは年配の人、ひったくり防止カバーは主婦などに渡すよう工夫している。

○ チラシ配りのとき、「これはあなたとおばあちゃんの分ね。」と言いながら手渡すと、チラシを読んでもらえる。

○ チラシを配るとき、話を聞いてくれない人が多い。また、チラシを受け取らない人も多い。街頭でのコミュニケーションは難しい。

○ 若い子は「ティッシュはいらない。ホッカイロがほしい。」と言う。そうした話をきっかけにコミュニケーションがとれるようになるのであれば、それで良いのかもしれない。

○ 振り込め詐欺防止の活動でティッシュやチラシを配っている。若い人はティッシュだけを受け取り、チラシはゴミ箱に捨ててしまう人が多い。

○ 地域で発生した具体的な犯罪事例が記載してあるチラシであれば受け取ってもらえる。

○ 年齢層によってチラシの配り方が異なると思う。お年寄りなら朝早く、声をかけて同じ目線でいろいろな話をすると興味を持ってチラシを受け取ってもらえる。

○ なかなかチラシを受け取ってくれない。自転車ひったくり防止カバーなどを付けたときは受け取ってくれた。チラシのみの配布は効果があるのか。

（広報活動・キャンペーン）

○ 広報活動は、警察の車両で警察官の運転により行っている。警察車両が使えないときは、周りから見て分かるように、自家用車に防犯ステッカーを貼って行っている。スピーカーで「振り込め詐欺に気を付けましょう。」と流している。

○ 駅前でキャンペーンを年間５、６回やっている。広報活動では世田谷警察署の方と一緒に車に乗って活動している。

○ 歩きタバコやゴミのポイ捨て禁止のキャンペーンを月に３回位、駅頭で行っている。

（高齢者の見守り）

○ 町会で民生委員と連携しながら、一人暮らしの老人を把握しようという話が出ている。
○ 団地では、孤独死も分からない状況にある。例えば、新聞屋さんとボランティア団体などがお互いに提携することも必要だ。
○ 孤独死を防ぐためには、「おはよう。」などの一声運動が良い。
○ 一人暮らしの老人に声をかける。出て来なくても「声だけでも聞きたい。」と話す。そのため、活動地域では老人の振り込め詐欺被害が発生していない。

（防災活動）

○ 地域の住民へ災害対策用に２、３日分の食事とペットボトル２本程度を用意するよう呼びかけている。
○ 防災訓練では、土嚢を準備することもある。震災はいつ起こるか分からないが、台風は分かるので１週間位前に区に申請すると持って来てくれる。
○ 小学校における地域安全マップづくりの指導や、防災士の資格を取得し防災活動をしている。防犯と防災は車の両輪である。
○ 防犯と防災は両輪だという意見に全く同感だ。交通安全、消防も含めて活動する組織ができると良い。
○ 自助・共助・公助。自分達の命は自分で守る。自分達のまちは協力して守る。そして、例えば避難所の運営やいろいろな道具、施設は公助で対応する。
○ 防災訓練の時間が長すぎる、２時間半位かかる。人数が多いと訓練にならない場合もある。全体での訓練は避難訓練だけとした方が良い。

（防犯機器・グッズ等）

○ 町内に防犯カメラを付けるのは、経済的にまだまだ難しい。
○ 地域全体に防犯カメラを付けるのではなく、ゴミの持ち去りや不法投棄が認められる場所に１台でも付けると良い。
○ 防犯カメラの設置に関しては、東京都に補助制度がある。例えば、町会や商店会と連携すると、都が２分の１、区が３分の１出すので、町会としては６分の１の経費負担で足りる。
○ 防犯用のポスターを作り、公園に貼った。町全体で「子供を見守ろう、育てよう」というイメージが持てるようになった。
○ 防犯ブザーを装着する位置が非常に気になった。地域に戻ったら、みんなと意見交換してみたい。

（環境整備）

○ 落書きや掲載期間が過ぎた掲示物、剥がれかかっている掲示物はそのままにしておくと、犯罪が起きやすいと言われているので注意している。
○ 退職した警察官と一緒に落書き消しや花壇づくりをしている。
○ 防犯カメラを付けると落書きや犯罪がなくなるのではないか。
○ 子供達や通勤・通学者が安心して利用できる歩行者空間の環境整備を徹底している。

○ 制服・制帽を着用し、違法駐輪警告札を自転車に貼っている。
○ 空き巣の86％は下見をすると聞いている。場所を選ぶ基準は、落書きのある所、ゴミの放置、自転車・バイクの放置、違法広告物などが挙げられる。

（活動内容の充実）

○ 団体をＮＰＯ法人にして子供の見守り活動をしている。
○ プランターを地域のＰＴＡなどに配付し、花を植えてもらった後、水をあげる時に、地域を見守る気持ちも育ててもらえるよう啓発活動をしている。防犯活動の手段はたくさんあるので、パトロール以外であれば行えるという人を参加させていきたい。
○ いざというときの連絡手段の一つとして、高齢者向けのインターネット講座の活動もしている。
○ 東村山警察署と新座警察署の各防犯協会は、近隣で何かあった場合、共同で活動できるよう姉妹提携した。
○ 定期的な活動は、きちんと続けることが大事である。例えば、「毎月何日の何時にはお茶会を開くので来てください」というように情報をオープンにして、毎月きちんとその時間に開催することが重要である。
○ 活動を継続させるためには、楽しくできることも大事である。音楽祭など学生が参加できるものを考えるのも良い。
○ 隣の町会では掲示板に「本日パトロール中」と貼紙をし、犯罪抑止効果を高めている。
○ 町会のお祭りのとき、地域の方にもお手伝いを頼むことでまとまりができている。お祭りに来ることができない高齢者には、金魚すくいのポイ紙貼りなどを依頼し「町会行事に参加した」という意識になってもらっている。
○ 小さな子供たちを対象としたお祭りをやると、祖父母が参加しやすい。
○ “まちなかサロン”という居場所づくりを行っている。誰でも自由にお茶を飲みに来てもらう。お茶を飲んでいるうちに、名前で呼び合えるようになる。お年寄りなどは馴染むのが早い。
○ 若い母親達が“ママサロン”をやることになった。子供を連れて集まってもらい育児相談等を行っている。

（参加者の拡大）

○ 町会の掲示板の数を増やした。町会旅行や餅つきなどの案内をすると、参加者が集まる。参加すれば顔見知りになれる。そういう仕掛けづくりが大事である。
○ 夜に人口が激減してしまう地域は、防災組織が町会だけで構成され、企業はほとんど参加してくれないので、行政から地元の企業に協力するよう働きかけを依頼した。
○ 夜のパトロールもやっているが、人数は減るばかり。「（女性のパトロールは）危ないから夜は出歩くな。」と言われ、活動ができなくなってきた。

○ 無理があるうえ、自分のやりたいことを削って活動しなければならないのはストレスとなる。
○ ボランティア団体が高齢化している。やみくもに入りなさいと言っても活動は長続きしない。

（若い世代の参加）

○ 若い人たちによるボランティア活動がないと困る世の中となっている。
○ 行政や教育委員会が積極的に取り組むと、学生など若い人がボランティア活動に参加する機会も増える。そうした環境づくりも高齢者の役目ではないか。
○ 若い人と高齢者の交流の場が非常に少ない。防犯ボランティアとしての現場経験を若い人に伝えるための交流の場が必要。
○ 年齢を超えてつながると、地域に変な人が入って来づらくなる。
○ 小学生や幼稚園児の頃からボランティアの教育が必要である。
○ 若い人は、仕事や家事などで忙しいため、パトロール活動に参加してもらえず、人が集まらない。町会主催の行事で活躍しても、ほとんど地元にいないため、子供達への声かけなどは上手にできない。
○ ワンルームマンションが増え、町会行事などに参加する世帯が減ったことも、人集めが大変な理由の一つである。
○ 若者を迎え入れるための仕組みづくりが難しい。若い人が活動に参加できるよう、地域団体なども体制を整える必要がある。
○ 若い人もお祭りだけ一生懸命やってくれるが、後が続かない。
○ お年寄りは若い人にいろいろなことを教えることができる。背中を見せて「ああいう生き方をしたい。」と思わせなければならない。

（学生ボランティア）

○ 学生には子供の登下校の時間に見守りができないなど時間的な制約がある。
○ 学生ボランティアを増やすためには、就活に有利となることのアピールや、ボランティア活動による単位取得を進めることが必要ではないか。
○ 大学生のボランティア活動は、授業もあるので月に３人程度しか参加できないときもある。
○ 学生ボランティアとして活動しているが、10 回参加すると地元警察署から感謝状がもらえる。感謝状ほしさに参加する学生もいる。
○ 大学を通して参加登録すると、警察署から活動案内のメールが来る。
○ 学生ボランティアは、町会のボランティア団体と一緒に活動したいと感じているが、交流がないため上手く入っていけない。
○ 地域と大学とのつながりを大学職員がレクチャーしてくれる。
○ 高校の生徒会でボランティア活動をしている。町会や警察署と協力して、公園に花壇を造ったり、掃除をしている。
○ お祭りのとき、近くの大学や高校に「お祭りの手伝いをしませんか。」と呼びかけると集まるのではないか。
○ 大学の部活動ごとにボランティア活動への参加を促すと良い。
○ 一人暮らしの学生は、地域の方と知り合う機会がほしいと感じていても、地元との接点が全くない。
○ 大学生には地域での存在感や地域への愛着がない。隣人の名前も知らない。地域の方から「一緒にやりませんか。」と言われても、すでに地元の人達の連携ができている中に入っていく勇気がない。

○ 大学生はさまざまな地域から来ているため、現在住んでいる地域を守る気持ちが薄いのかもしれない。
○ 自分の学びたい分野が福祉関係だったことが現在の活動につながっている。このようなきっかけがなかったら、防犯という分野では活動していなかったかもしれない。
○ 若い人が活動に加わると活気づく。
○ 若い人達が当然のようにボランティア活動に参加してくれることは心強い。
○ 学生が懸命に活動しているのであれば、もう少し大人も頑張って良いのではないか。地域に持ち帰って意見交換したい。

（学校・ＰＴＡ・地域との連携）

○ 地元の小学校などと連携して、大人２人と子供２・３人で一緒にパトロールしてはどうか。
○ 小学校の活動として、登校班ごとに夜のパトロールをしてはどうか。
○ 町会のパトロールには、小学校ＰＴＡや渉外委員が必ず２名入っている。
○ 小学生による各地域の公園などの清掃活動に町会として協力している。小学校の行事のときは、連絡網ですぐ集まれる組織となっている。
○ 中学校の防災組織と町会、商店会が協力して取り組もうという動きが出てきたので充実させたい。
○ 一番困っているのは、町会に入ってくれないことである。300 世帯のうち 70 世帯位しか入ってくれない。
○ リーダーが変われば一気に変わる。ＰＴＡ会長などがボランティア活動を行事に盛り込めば良いのではないか。
○ ＰＴＡや学校に声をかけて、児童に「日頃の活動を紹介する」授業を設けていただいた。

（活動費）

○ 活動費や援助・報償がほしい。ボランティア活動は無償ではやっていけない。
○ 警察署からのたすき、のぼり旗、腕章等が支給されるのみ。
○ 町会は自治会費が使えるから苦労はないが、ボランティアには出ない。
○ 子供と同じで、何かやったらご褒美が必要ではないか。
○ 町会からの活動補助は防災に出ても防犯には出ない。
○ 青年部の夜間パトロールには町会から活動費が出ている。

（その他）

○ 防犯協会などの団体に所属していないと、警察や行政の支援を受けづらい。
○ 塀のない小学校では、犯罪等は一つもないと聞いている。できればそのような学校が一番である。新しく家を建てるときは、塀を低くすると「おはよう。」も言いやすくなる。
○ 一人暮らしの老人に関する情報入手は、個人情報保護の観点から難しい。民生委員をやっているため、やっと担当する町会から要援護者の名簿をもらえた。
○ 町会には民生委員が２人しかいない。一人当たり約 120 ～ 130 人ずつ受け持っている。災害があったとき、どうなるか不安だ。
○ 防災活動に町会の人達が参加して、それぞれが役割を受け持つ。災害時には、その人達が活動することとなるので、町会は大事である。

2 第2分科会（参加者の拡大）

（高齢化と後継者）

○ 参加者の高齢化が進んでいる。ビラ配り中転んで怪我した人がいたので、参加者の年齢上限を 88 歳にしようとしている。ボランティア活動を楽しみ、生きがいにしている高齢者もいるので、なかなか断れない。

○ 見守り活動を行う者には高齢者が多い。その高齢者の参加も少なくなり、若い人もボランティアに参加しないため、活動を週５日から２日にした。

○ 防犯ボランティア組織に入り 11 年目だが、その後新しい人は一人も入ってこない。サラリーマンの参加はなかなか難しい。

○ 町会の共通課題は、高齢化と若い人が仕事などで活動に参加できないことである。

○ 65 歳まで働くようになり、ボランティアに協力してくれる人が少なくなった。若い人が全然入ってこない。それが一番の悩みである。

○ 後継者がなかなか見つからない。自身の健康のためにもなるし、地域の人とも顔が広がり良いことだと勧めるが、なかなか参加してもらえない。

（拡大方策）

○ 自分たちの活動に共感した人だけで活動している。

○ 町会長や副会長が定年退職する人を訪問して、「退職したらボランティアどうですか。」と参加を勧めている。

○ 子供達にチョッキを着せて、午後６時頃から１時間程度見回る。保護者が付いてきてくれるので人数が集まる。

○ 自治会の防犯担当のほか祭りも担当している。祭りになると 100 人体制を敷くため、「（お手伝いを）頼みますよ。」と声をかけ、『一杯飲み会』を頻繁にやる。そこから絆ができる。こうしたことが防犯活動にはとても重要である。

○ 積極的に参加を促していないため微増である。

○ 下校時間に合わせ掃除している。その際、子供達に遠くから声をかけている。仲間を募ろうと思っても入ってもらえない状況。地道に頑張ろうと考えている。

○ 新しい人を入れるしかないが、宣伝方法がわからない。

○ 50 代～ 80 代の仲間は大勢いる。次世代につなげる方法がわからない。

○ 自治会活動に参加していないサラリーマンを引っ張り込みたいと、プラス面をアピールして声かけしている。

（若い世代の参加）

○ いつでも受け入れるので、ずっと活動してもらえる人がほしい。だんだん年をとるので若い人に入ってもらいたい。

○ 大学の部活と連携して防犯活動を行ったが、２、３回しか続かなかった。
○ 防犯協会の活動に若い世代を誘ったところ、一度は 30 代、40 代の人も来てくれるが、２回目、３回目となると、なかなか来てくれない。
○ 我々の年寄りグループの中に若い人も入ってもらうきっかけができると良い。
○ 学生が参加すると確かに若返るが、一時的なものになる。地元の若い人が毎回出て来られるようにするにはどうしたら良いか。
○ 若い人を無理に誘っても駄目。積極的にボランティアへ参加してくれる人でないとどうにもならない。
○ 若い人がボランティア活動をやれば、それが将来につながっていく。
○ 高齢者と若い人の交流の場をつくらなければいけない。そこで意見交換ができると意識や活動内容も変わるのではないか。

（学生ボランティア）

○ 警察署からの依頼により学生ボランティア団体を設立した。福祉系のボランティアが多い大学で、防犯は異質のため不安だった。参加人数の増減には問題ないが、学生同士の横のつながりは薄い。
○「学校で夜の見守り活動を始めよう。」と話し合い、一度活動してみたが、地域との連携がないと「不審者が来た。」と思われてしまう。オレンジの腕章を付けて活動しているが、あらかじめ地域に活動を伝えるようにしている。
○ 登録は 40 名であるが、実質パトロールに出ているのは 20 名位。防犯活動は土日などに行うことが多いので、メンバーは交代で参加している。
○ ボランティア活動に参加する学生は、主に公務員を目指すなど防犯意識が高い。しかし、まだ参加者が少ないと感じている。
○ 当初、学生ボランティアに入った理由は、何となくだったが、活動を通じて地域の人と係わるのが楽しくなった。学生時代にボランティア活動することで、社会に出てもその経験が活かせる。
○ ボランティア活動をすると、何らかのメリットがあり、自分のためになる。就職活動のネタになることも多い。計算してやるものではないが、それでもやらないよりは良い。
○ 高校生・大学生のボランティアは、年寄りが褒めてあげることで喜びを感じ、「やりがい」につながっている。
○ 日本大学や成城警察署付近の大学同士が集まって活動している。他大学とコミュニケーションをとりながら連携することが必要だ。
○ 若い人がいると勢いも出るし、大切でありがたいと言われた。地域の防犯は非常に大事なので、これからもしっかり参加していきたい。
○ 大学生の防犯ボランティアである。振り込め詐欺や、自転車のマナーアップの声かけ、交通安全教室のお手伝い等をやっている。自分達も仲間を増やして頑張っていきたい。また、自治会や他の団体の方と交流したい。

○ 学生に参加してもらえるのは非常に嬉しい。若い人が参加してくれると我々も士気が上がる。
○ 隣接する地域に大学があるので一緒に活動したい。
○ 学生は大学が所在する地域との交流が少ない。ボランティア活動を通して、地域の人と交流することで地域に愛着を持つようになるのではないか。
○ 地域との交流を深め、同じ目的を持って活動することにより、若い人、年長者のそれぞれに得られるものがある。
○ 他の学生と世間話はできても、踏み込んだ話ができずもどかしい。活動終了後も、授業のためすぐ解散してしまう。交流のための場が設けられたら良い。
○ 行政や警察に「交流の場をつくってください。」と言えば、設けてくれるのではないか。
○ 中高年齢層は子育て、仕事が忙しく無理である。やはり大学生の参加は重要である。
○ 中学生の場合はボランティア手帳がある。活動に参加するとボランティア手帳に判子が押され、生徒はボランティア手帳を見て「こういう活動をした。」と思い出作りになる。

（活動内容の充実・工夫）

○ お盆と年末は、子供も一緒にパトロールを行っている。小さな子供は、保護者に同伴してもらっている。また、参加した子供たちには感謝状を出すことにした。これは非常に良かった。
○ 毎日のパトロールは、朝９時から夜９時までの時間帯のうち、ランダムで行っている。以前は非常に空き巣被害が多かったが、パトロールを始めると『空き巣被害ゼロの月』となるなど、すぐに効果が現れた。
○ パトロールの時間帯は、試行錯誤を重ねた結果、11 時から 12 時、天気に関わらずやると決めた。その結果、みんな出て来るようになった。今では歯を磨くのと同じである。
○ パトロールへの参加は自由で強制はしていないが、みんな来てくれる。顔見知りが声をかけると、足腰が痛い人まで出てきてくれる。
○ パトロールの標語をいっぱい作った。その中の１つに、『能書きも肩書もいらないパトロール』というのがある。
○ 子供見守り活動は、朝きちんと起きないといけないため、規則正しい生活となる。
○ 日頃から、「おはよう。」「かわいいわね。」「暑いわね。」と声かけや挨拶などをしている。そうすると最初は黙っていても、いずれ返してくれるようになる。
○ 子供見守り活動に参加したことで、地域に溶け込むことができた。保護者とも非常に親しくなった。
○ 防災や消防団、防犯、交通安全の関係者が集い、お茶を飲みながら話し合える場所としての『番屋』の設置を行政などに提案している。
○ 防犯活動は、警察ができる範囲、行政でなればできない支援、民間のパワー、これらが三位一体として機能しなければ良い取り組みが行えない。
○ 災害ボランティアは、大学などで相当細かく組織ができている。防犯と防災が一緒になれば、災害ボランティア組織も防犯のほうに引き入れることができる。

（行政や警察との連携）

○ パトロールは、警察官に同行してもらって活動するとよい。警察官がいるだけで、防犯活動であることが一目でわかる。夜のパトロールなどは特にそうしたほうが良い。

○ 毎月 20 日は安全安心の日で、パトロールが決まっているが、警察はいろいろなことを言って来て、皆決めてしまう。そうすると皆働いているので、人集めが難しい。

（学校・ＰＴＡとの連携）

○ 見守り活動の担い手が年寄りばかりであったため、ＰＴＡに働きかけ、連携した活動ができるようになった。

○ 社会福祉協議会を通して、地元の学校へボランティアの募集をすることができる。ただし、両親の承諾が記載された証明書が必要となる。

○ 幹線道路のゴミ拾いを行うため、６つの中学校に声をかけたところ、120 人位が集まった。参加した中学生達は「通行人に褒められて嬉しい。」「拾うのは大変だから、汚すのは止めよう。」と感じたようだ。

○ 地域活動の中で、異世代がふれあえるよう一晩学校で暮らす企画を開催したところ、ＰＴＡや保護者の意識が一変した。『異世代交流の会』などをつくれば、スムーズに腹を割って話せるようになるのではないか。

（自治会・町会との連携）

○ 学区内にある３つの町会が連携し、防犯カメラ６台を取り付けた。設置にかかる費用には、都と区の補助金を活用した。

○ 町会として『まちなかサロン』を協力者の立場で運営している。実施主体は社会福祉協議会などであるが、町会がこのような場を設けても、町会未加入者が多いため参加してくれない。

（企業との連携）

○ 渋谷区はオフィス街なので、地元企業との協力の必要性が出ている。

○ お金と人を出してもらうという点で、企業は必要である。

○ 近所に企業があるので、会社の人達に「新人教育にどうですか。」「町内の人と仲良くするのはどうですか。」と声をかけると来てくれる。

（活動費）

○ 活動費は区の助成金やバザー等を行い捻出している。区や警察が非常に力を入れてくれて、三位一体で活動しているので、活動経費の面は苦労していない。

○ 一番の悩みは活動の維持である。ボランティア活動は、交通費も全部自己負担。休憩時に出すお茶などのような活動費がほしい。冬は、焼き芋や肉まんなど出してあげたい。ボランティア活動へもある程度の経費補助をいただけるような制度が必要ではないか。

○ ボランティアは報償を求めてはいけないと言われるけれど、少しは報償がほしい。

○ 大学の中にボランティアセンターがある。活動終了後は、学校が経費で麦茶などを出してくれる。ボランティアを支えている。

○ 町会に加入していれば、町会の活動として町会や自治会の予算から、多少は活動費を補助してくれる。

○ 防犯活動に対する支援として、帽子などは貸与されるが、活動のための補助金は出ない。しかし、防災活動には補助金が出ている。

○ 六本木では企業が補助してくれる。パトロール活動なども、会社からの指示により企業の方が参加してくれる。企業は経営者のＯＫが出れば、従業員もお金も出してくれる。

（その他）

○ 地域づくりに興味があったため、ワークショップに参加した。このような場を体験すると、「こういう意見交換が、これからの日本を作っていくのに重要だ。」と気付く。

○ このようなワークショップに参加すると、学生だけではなく、いろいろな方と出会えるのでコミュニケーション能力が身に付く。

○ 無償ボランティアは、これから先は成立しない。

○ 有償ボランティアにしないと無理である。ある大学ではボランティア活動をするために授業を３回まで欠席しても良いという制度がある。そういった協力・支援体制が整備されないと上手くいかない。

○ 防犯パトロールに入った理由は、親を亡くしたとき町会にお世話になり、自分にできる恩返しとして、パトロールならできると思い始めた。

3 第3分科会（行政や警察との連携）

（連携の内容）

○ 活動内容を報告書にまとめ、警察署と区役所に提出している。
○ 町会とは異なる自主防犯ボランティア団体だが、区や警察署と連携して、イベントやパレードなどにも参加している。
○ 警察署で防犯指導員のような研修をやってもらえる。連携は上手く取れている。
○ 毎月 20 日に、警察官と一緒にのぼり旗を持ちタスキをかけて、駅前までパトロールしている。
○ メンバー募集のチラシを持参して、警察へ挨拶に行ったところ「喜んで協力しますよ。」と言われた。
○ 振り込め詐欺防止キャンペーンを、毎月 15 日に必ず行っている。区の安全パトロール隊も、のぼり旗やタスキ、ティッシュを持ってきてくれる。青パトで２～３人来てくれる。
○ 区によっては補助制度があり、「こういう団体を作った。」と申請すると、ジャンパーや腕章、帽子などを作るための補助金をいただくことができる。
○ 防犯用のジャンパーは警察署で配っている。
○ 学校でのボランティア活動は生徒会がまとめて行っていて、外部のボランティア活動は町会や警察署と行っている。最近では防犯等キャンペーンをしたり、公園の花壇に花を植えている。
○ 区内で地域活動をするとポイントシールがもらえる。ポイントが貯まると、商品券等に交換できる『長寿応援ポイント』という制度もできた。防犯活動の場合、１回 200 円とありがたい制度である。

（連携の課題）

○ 察や行政は、担当者の異動が頻繁なことが課題である。
○ 行政や警察、学校が一体となっているケースは非常に少ない。縦割り組織で、情報はそれぞれが持っており出してくれない。
○ 行政では、いろいろなサービスを行っているが、それを知らない人が多い。知っている人だけが利用し、他の人は上手に使えていない。
○ 行政や警察が情報の共有化をしていない。
○ 警察、消防、役所は縦割り過ぎて、お互い関係がないとなってしまう。これからどうやって変えていけばいいのかが課題だ。
○ 警察は行きやすいが、消防には行きにくい。もっと消防署も門戸を開くことが大事ではないか。
○ 役所関係は入りづらい。どこに行って、どうしたら良いかわからない。地域で聞かれた時にお手伝いができるよう勉強したい。

○ 行政が事務局をやってくれると各町会は必ず人が集まる。しかし、中身は自分達でつくっていかなければいけない。そのための時間が必要という悩みがある。
○ 警察署から協力依頼がある。月２回程度なら協力できるが、それ以上となると協力してくれる人は少ない。警察署からの協力依頼が増えることに悩んでいる。

（連携の強化）

○ 豊島区がセーフコミュニティの認証を受け、池袋駅に大きな看板を掲げた。セーフコミュニティは、防犯、防災、交通事故防止を三本柱としている。単に犯罪防止だけでなく、防災や登校時の交通安全も含めて、子供達を見守ろうとしている。民間だけではできないことなので、行政と警察と民間の三位一体でやることが重要。
○ 行政や警察との連携で最も大切なのは、頻繁に顔を合わせること。訪問して訴えることである。
○ 警察官にもパトロールに参加してもらえるよう、警察署にも顔を出している。顔を出すことは大切だ。
○ 警察との上手な連携のためには、防犯でも、交通安全でも、警察と話をすることが重要だ。
○ 上手に行政と連携するには、役所を訪問し「私はこういう者で、何か私にヒントを頂けますか。ご指導いただけますか。」と聞くことが大事である。まずは足を運ぶ、そしてヒントをもらう、顔見知りになることである。
○ 防犯講習会を受けた仲間達と、毎月１回会って情報交換している。そうすると、行政サービスに違いがあることがわかる。
○ 市では、安全・安心まちづくり条例に基づいて、必ず安全・安心まちづくり連絡会を開催する。警察、防犯、交通、消防、保健所、教育委員会が参加し、意見交換・交流をしている。その結果を各団体が持ち帰り、関係者へ周知している。
○ 行政との連携は顔を合わせて親近感を持つことが第一歩である。
○ 防犯も交通安全もあるいは防火も、警察署以外に消防署等との交流も必要ではないか。
○ 行政と警察と地域とが三位一体になって活動すると、非常に大きなことができる。警察には力があるし、行政にはお金がある。地域には気持ちがある。

（活動内容の充実・工夫）

○ パトロールの年間スケジュールを作り、それに基づいて活動している。
○ 夜の防犯パトロールでは、ハンドマイクで「只今、防犯パトロール中です。」と言いながら、拍子木を叩いている。また、昼間のパトロールは子供達の下校時間に合わせて実施している。
○ 団地内で、週１回、拍子木を叩きながら夜間パトロールを行っている。
○ 区内には、様々なパトロール隊が多数存在している。そのおかげで、侵入盗やひったくりなど減ってきており、パトロール隊の活動が評価されている。
○ パトロール隊が神経を集中して活動してくれていることにより、下着泥棒がいなくなった。これはパトロール隊の活動成果である。

○ パトロールで一番大事なのは、「誰かが見ているぞ。」と知らせることと、「実行犯にさせない。」という気持ちを持つことである。
○ 警察からいただいた赤色のユニフォームを着用して住宅街をパトロールしていると、「ご苦労さまです。」と声をかけてくれる人々がいて、やりがいを感じる。
○ 警察からもらった緑色のチョッキを着用してパトロールしていると、「どうもご苦労さまです。」と言われ、何か嬉しくて偉くなったような感じになる。

○ パトロールのとき、トングを持ってゴミを拾っていると地域の人達に感謝される。
○ 地域を第１～３ブロックに分け、必ずどこかのブロックで車両による広報活動を行っている。また毎月、チラシ配りなどによる防犯キャンペーンを行っている。
○ 銀行ではなく、ＡＴＭで高齢者の方に振り込め詐欺防止の声をかけている。
○ 会員は 180 数名在籍し、必ず月１回位は活動するように呼びかけている。会員になった以上は何か活動をしたいという意見が多い。
○ 団体構成員は仕事、子育て、介護をしている年代であり、一緒に防犯パトロールを行うという発想はなかった。ただ、それ以外で地域の安心に繋がるような活動ができないかと考え、プランターを配付し、プランターに水をあげる時間を『見守りタイム』にしてもらっている。この活動によって意識啓発をしている。
○ 現在は、交通安全協会や防犯協会、防災協議会などが、バラバラに活動しているため、人数が足りないなど課題も多い。これを解消するためには、いつでも団体同士がお茶を飲めるような場所を行政が提供し、そこで情報交換が行えるようにすると良い。防犯と防災は、消防団も含めて同じメンバーにより取り組まれることが望ましい。一緒にやっていかないと、まちを守ることはできない。

（若い世代の参加）

○ 防犯ボランティア活動に、もっと若い人達が入ってきてほしい。老人会のみでやっている地域もある。
○ 行政や警察から働きかけて、地域パトロールなどに、若い人をどんどん送り込んでくれないと大変である。昼間はお年寄り、夜は若い人というのが理想である。
○ 若い時にボランティア活動を経験すると大人になっても取り組みやすい。大人になって未経験から始めようとしても難しい。
○ 活動の主力は婦人部や防犯協会であり、メンバーは年配の方が多い。何とか若い人に入ってもらいたいが、なかなか難しい。
○ 子供が狙われる時間帯は、主婦は忙しく、手が離せなくなる時間帯と重なる。見守り活動に参加できない。

（学生ボランティア）

○ 学生ボランティアによる小学生の下校時の声かけは、「さよなら。」「気を付けて帰ってね。」のふた言だけれども、参加した学生は「本当に楽しかった。」と話している。

○ 東日本大震災以降、着実に学生のボランティア意識が高くなっている。「ボランティア活動をしてみたい」という気持ちがあるので、それに応えてあげたい。

（学校・ＰＴＡとの連携）

○ 月１回、学校の校外委員と防犯指導員、町会役員、防犯部が合同でパトロールを行っている。

○ ＰＴＡのお母さんと一緒に１時間、遊んでいる子へ「気を付けて帰ってね。」「暗くなるからね。」「５時になったよ。」と声をかけている。

（町会との連携）

○ 目白大学の学生ボランティア（ピーポーズに登録）は、地元の行政との連携により、区のイベントには参加しているが、地元の町会などとのつながりは全くない。何とか、上手く連携できないか。

○ 町会長のリーダーシップが重要である。警察、行政、学校でも、（町会と）連携を取りたいときは、まず町会長さんに話を持っていくと良い。

（その他）

○ 防犯協会会長のリーダーとしての姿勢は、ボランティアの方々の取組意欲や積極性に大きく影響する。

○ 一日警察署長として芸能人を呼び、横断幕を持って商店街をパレードしているが、犯罪の抑止になるのかと疑問。

○ 警察でも行政でも、振り込め詐欺防止ばかりやっていて少し疑問を感じる。

○ 活動にはお金が必要である。行政にはもう少し支援してほしい。

○ 商店街がなくなってきているが、やはり必要だと思う。商店街があった時代は、声もかけやすく防犯の役にも立っていた。

○ 最近、近所の子供の顔と名前が全くわからない。昔は、この家のお子さんだとわかったので、注意する時もこの家に行けばというのがあったが、今はない。

○ 住民も、顔と名前が分かりづらくなっている。マンションは、住人の出入りが激しい。

○ 行政は縦割りで、他自治体と横のつながりがない。警察も他の管轄に口出しができない。しかし、地域住民による情報交換により、信頼関係など様々な効果が生まれる。他の地域の行事に応援に行くこともできる。

4 第4分科会（学校・PTAとの連携）

（連携の内容）

○ 町会では、毎月 20 日「５時回り」という見守り活動を小学校のＰＴＡの方と一緒に実施している。

○ 学校と連携し、週２回午後３時から５時頃まで青パトでパトロールしている。そのほか週１回ＰＴＡと巡回している。

○ 毎年、区の「環境行動の日」に、６校の中学生を 120 人位集め、幹線道路のごみ拾いを行っている。道行く人が参加した中学生を褒めてくれる。褒められると中学生はやる気になる。

○ 防犯活動に若い人を入れることを目標に、ＰＴＡ校外委員に協力してもらい防犯マップをつくった。子供達から見て「危ない･怖い」という場所を抽出した。子供見守り隊として、お母さん方が協力してメンバーを出してくれた。

○ ＰＴＡが行事参加のポイント制度を設けている。自分達の団体にパトロール参加すればポイントをもらえるようにしていただいた。その結果ＰＴＡの方々も参加するようになった。

○ 町会では１年ごとに班長が決まり、順番でほとんどの人が班長になる。町会では年１回、前年度の班長と次年度の班長が旅行に行ったりして、交流を深めている。

○ 地域防犯活動に町会からのバックアップがあれば活動が活発となり、事故や空き巣、ひったくりなどの犯罪が少なくなる。

○ 町会と連携するため、子供達の誕生日給食会に、毎月各町会から２人ずつ参加させるようにしている。１年生から６年生まで一堂に会して一緒に食べる。そこで顔見知りになる。組織作りは、見えることをやれば付いてくるのではないか。

（連携の課題）

○ 学校との連携については、話し合ったことがない。ＰＴＡでも防犯パトロールをしているようだが、活動が重なることはない。

○ 先生方にとって、ボランティア活動はうっとうしいようで、「必要ないのか。」と感じるときがある。

○ 学校、ＰＴＡと防犯の話をする機会が全くない。話し合いの場を持つべき。

○ 学校と地域が話し合って、検討した方が良い。

○ 町会には、未就学の子供が参加できる行事が少ない。若い夫婦は町会に入らないし、入っても何もしない。町会離れは仕方がない。

○ 町会は、昔から住んでいる人が大威張りしている構造がある。

○ 自治会から抜けているので、町のお祭り等には参加していない。以前、町会に加入してみたが、地元の人でがんじがらめという印象があったので、抜けてしまった。

○ 防犯上も、人とのコミュニケーションが大切。コミュニケーションを取ることが難しい社会になっており、回覧板も少なくなってきている。近所にどういう人が住んでいるのか全然わからず、地域のつながりが分断されている。

○ お年寄りが活動する午前10時から11時頃に防犯活動を行っているが、何故かあまり人に会うことがない。学校やＰＴＡ、地域の方とコミュニケーションを取り、地域のことをわかってから活動しないと意味がない。

○ 引越ししてから５年。古くから住んでいる人が多く、溶け込むのが難しい。

（連携の強化）

○ 育成会連合会では、子供に関係する団体が集まり、話し合いの機会を設けている。警察も同席している。

○ 学校は、「地域で生徒を見守ってください。」と地域の高齢者の方にお願いするが、どのようにして見守る組織を立ち上げ、スクラムを組むかは町会の対応次第である。

○ 地域の安全･安心活動は、学校が主体となってはいけない。学校は授業を教える場であり、地域が率先して、学校に協力を求めることが重要である。

○ 学校と連携するのは非常に難しい。ただし、毎日通学路に立っていると、ＰＴＡの方なども見ている。そういう所からきっかけを作るのが第一だと思う。

○ 学校は「連携、連携」と言うが、あまり連携がうまくないと感じるので、こちらから学校側に行くと良い。

○ 一番大切なのは、ＰＴＡと83運動であり、ＰＴＡは結構大きな力を有している。ＰＴＡやＰＴＡ連合会で子供見守りの人材育成を図ると効果的である。

○ 自分が地元住民であるという立場で、防犯意識を持つことの大切さを改めて実感した。地域住民の連携もなくなってきているので､町会活動にも目を向けるべきだと気付かされた。

○ 学生も地域の人々と連携を取りたいと思っている。

（活動内容の充実・工夫）

○ パトロール活動は危険なので３人以上で行っている。雨天時は行わない。

○ パトロール中に、「こんばんは。」「お帰りなさい。」と挨拶をしている。最初は戸惑っていた子供達も、今ではちらから声をかけてあげると、「こんばんは。」と返すようになった。

○ 定期的なパトロール活動により「この地域はパトロールをしている。」とのメッセージを発信することで、犯罪者は警戒心を強める。犯罪者を地域に入りにくくする。

○ 子供達の登下校の時間に『見張り番』をする。見張り役なので、本当に危ないことがあったとき、注意するだけで十分である。

○ 中・高校生は「おはようございます。」と言っても返事が返ってこないが、何度も繰り返すことで、必ず返事をするような子に成長していく。

○ 地域の『安心すこやかセンター』と連携し、高齢者の家を訪問している。玄関の中に入らず、「ご無事ですか。」という声かけをする。また、その状況をセンターへ報告している。

○ 民生委員は、高齢者の状況がわかるので、民生委員とタイアップしてやると良いのではないか。

（若い世代の参加）

○ 若い人達と、経験を積んでいる人達との交流の場を持ちたい。若い人達にも、経験豊富な人やお年寄りの意見を聞き、自ら活動に反映できるような環境づくりをやってほしい。

○ 若い人達にも育ててもらうという気持ちや姿勢が大事で、つまらないと思う話でも、「得られるものは必ずある。」と耳を傾けていると、良いことを言ってくれるかもしれない。

○ これからは、若い人達がボランティアの道筋を新たにつくっていくことが非常に大事である。そのためには地域との連携は不可欠である。

○ 活動回数を重ねると、お互いがわかるようになるので、若い人達には２回、３回と参加いただいて交流が深まるようにしてほしい。

（学生ボランティア）

○ 高校では、生徒会がボランティア活動をまとめてやっている。町会や警察と一緒になって、キャンペーンや、近くの公園の花壇造りなどの活動をしている。

○ 高校生のボランティア活動を広めてもらいたい。地域にも高校があり、清掃活動をよくやってくれている。高校生が参加する地域パトロールも考えているが、授業等を考えるともう一歩踏み込んでいけない。そのあたりは、大学生と違いがある。

○ 高校生と大学生では活動内容も変わる。高校生は活動の幅が狭まり、学校周辺の清掃活動等が主となるが、それで充分だ。

○ 学生達は、授業などの空き時間に、大学近くの住宅を見回り、ついでにゴミ拾いもする。それを見たお年寄りがそばに寄ってくるので、学生はいろいろな話が聞けるし、褒めてもらえるので非常に嬉しいようだ。褒めてもらえるのは、若者にとっては最大の喜びである。

○ 警察署主催の防犯活動（振り込め詐欺撲滅運動、ひったくり・万引き撲滅運動、交通安全）に参加している。

○ 道を歩いている人にチラシを渡すのは難しいが、理解してくれない（受け取ってくれない）人もいると割り切って活動すると楽しい。

○ 大学生が防犯ボランティア活動に参加していることを初めて知った。もっと宣伝してもらいたい。

○ 学生に防犯ボランティアをやっていただいているのはありがたい。

○ 学生時代にボランティア経験があると、卒業してからもボランティアをやってみようという気持ちが起きてくる。経験の有無は大きい。

○ 学生は卒業して社会人となり、新たな活動地域に根付いていく。その地域でも同じような活動をすぐに行う柔軟性を持っている。非常に貴重な存在である。

○ ボランティアの考え方が根付いていけば、本人にとってプラスになる。住民の社会参加の流れを学校や地域全体で進めていく時代になっている。学校の先生にも積極的にいろいろな活動に出ていただくことが大事である。

○ 学生ボランティアの活動の中には、自治会の方と一緒に活動することもあるので、活動終了後、自治会の方と何も話さずに解散するのはもったいない。

（その他）

○ 最近一番の問題は、朝の酔っ払いの多さである。子供たちの通学路でも傷害事件が発生している。子供は安心して通学できず学校を替えてしまう。

○ 地域の子供達も巣立ち、地元の学校は廃校となり『高齢者のまち』となった。子供が健やかに地域で育てられるようなまちづくりをしていかなければ、まちは発展・継続できない。

○ 一部の区市では、地域安全マップづくりがとても盛んで、ある区は統廃合になる前の学校の区域でほとんど実施していた。しかし、学校や教育委員会により実施していない区市もある。地域安全マップをどうやって広げていくかが課題である。

○ 日本人のボランティアに対する認識が非常に低い。地域がボランティアというものを、きちんと受け入れて認めることが必要だ。

○ 現在の住居は、外構をなるべく高くせず、周囲からの目線が届くような体裁を取り、地域を犯罪から守るというまちづくりが主流となっている。

○ 登下校のとき、高校生が道路いっぱいに歩き、自転車が通れない。小学生もマナーが悪いので、時々注意している。

○ 駅から大学まで警備員を配置している大学もある。

○ 区内の小学生は、ストラップ型のＧＰＳ付きの防犯ブザーを持たされているが、必ず音を鳴らすことができる位置には付いていない。この取組は周囲からの評価が高いが、子供達には負担のようだ。間違えて音を鳴らすと怒られ、位置情報と個人情報がセンターに通報されてしまう。間違えて鳴らす子も多いので、電話機能で内容を確認してから、（必要な場合に）登録しているボランティアが駆け付ける。

○ 身を守るためには機械だけでは駄目。人と人とがつながらないと何にもならない。機械はやはり道具でしかない。大声を出す練習をするとよい。

第3 ボランティア団体等の活動紹介

「いいなぁ 安心まちづくりワークショップ」のアンケートにおいて、参加者の皆さんから「今後の活動の参考となる事例」として挙げられた団体等に、活動状況を取材しましたので紹介します。

1 中野区環境井戸端会議

プロフィール

●名　称：中野区環境井戸端会議
●設　立：平成 13 年
●構　成：中野区環境アドバイザーの資格を取得した人達の集まりとして発足
●参加者：8 名
●設立経緯：中野区の地域環境アドバイザー養成講座の第 1 期修了後、アドバイザー仲間を核にしてグループを結成した。
●活動内容：子供の安全見守り・環境美化等
●活動頻度：不定期（対応可能なメンバーで活動）

鈴木さん（中野区環境井戸端会議代表・中野区白鷺町会環境福祉部長）

ボランティア活動に参加したきっかけ

○ 平成 14 年、還暦を迎え“おつりの人生”で無理なく何ができるか考え、防犯を兼ねたゴミ拾いを一人で始めた。朝 5 時半頃から、袋を 2 つ持って歩き、6 時半頃には家に戻った。ゴミ拾いを始めて 2 か月くらい経った頃、地域の人に「ご苦労様」などと声をかけられるようになり、この一言で活動に自信がつき、昼間の美化活動へと一歩前進させた。

○ 平成 17 年、さらに地域の役に立とうと「東京都安全・安心まちづくりアカデミー」を受講し、いろいろな先生からのお話に目から鱗が落ちた。講座で学んだことを踏まえ、通学路の子供見守りやあいさつ運動、地域安全マップ作製の指導員としての活動などへと活動の幅が広がっていった。

活動費

○ 環境井戸端会議では会費を徴収していない。何か事業を実施するとき、行政機関などの補助金等を活用する。ただし、補助割合によっては自己負担の場合もある。

取組状況

【緑のカーテン】

○ 学校で緑化推進活動ができないかと考え、地元の小学校にゴーヤを使った「緑のカーテンづくり」を提案した。当初は受け入れてもらえなかったが、平成 19 年に新しい校長先生

に再度お願いして、校舎の壁面（窓の外側）に 214 本のゴーヤを植栽することができた。これにより、壁面温度が下がり、室内と室外で６℃の温度差が出た。

○ 隣接自治会にゴーヤの堆肥について働きかけたところ、お年寄りが落葉で作っていた堆肥を快くわけてくれた。また、ゴーヤへの水遣りは他町会からも参加してくれるなど、この活動を通して、小学校を核とした町会、自治会同士の連携ができた。

○ 夏休み前に、子供たちと一緒にゴーヤの収穫祭を行い、給食に収穫したゴーヤを出していただき全校児童で食べた。また、取れた種は翌年の事業に使い、育てた苗の一部は、児童館など地域の希望者に無料配布することで、仲間の輪を広げている。

【子供の見守り】

○ ～挨拶は投げ、返事は受ける～

８年前から小学生の登校時の見守り活動を、ほとんど毎朝行っている。「目立つ格好」で「決まった場所」に立っていると、数回会っているうちに子供達からあいさつをしてくれるようになった。まずは、「知らないおじさん」から「知っているおじさん」にならなければならない。「笑顔で挨拶の響くまち」になれば、子供は必ず返してくれる。

○ 下校時、公園で５人の小学４年生グループに出会い、「ボランティアグループをつくった。ゴミを拾って、この公園を綺麗にしたい。やり方を教えてほしい」と言われた。（校長の了解のもと）休みの日に集まり２つの公園を掃除したこともあった。

○ 同じ時期に町会に防犯パトロール隊が結成され、発起人の一人として活動するようになった。区や警察署などの支援でユニフォーム、ベスト、帽子、腕章、停止灯などのパトロール用装備品を揃えてもらった。また、防犯パトロール隊の自作ステッカーを作成し、隊員の家へ門標として貼ってもらった。

○「いつでも、どこでも、無理なく、自由に」活動できるように、時間も何も決めなかった。「やりたい人がいれば、ユニフォームを着て歩いてみてください。」と声をかけ、仲間を増やしていった。

○ 子供たちとの会話で得た情報の中には、学校の先生も知らないことがある。食事や勉強、行事などいろいろなことが出てくるので、この情報を学校側に伝えている。

【道のゴミ無くし隊】

○ 道のゴミ無くし隊の活動は、幹線道路のゴミを拾って歩く活動であり、平成 17 年から６年間続けた。区内６の中学校の生徒や教師、ＰＴＡをはじめ、企業、町会役員、民生児童員、地域住民、区職員など毎回 130 名を超える参加者があった。

○ 活動後は、小学校の調理室で井戸端会議のボランティアなどで作った「カレーライス」や「すいとん」を全員で食べた。
○ 防犯の第一歩は､「ゴミのないまちづくり」から。綺麗なまちには犯罪抑止力がある。環境が子供を育てるので、大人は環境を良くしなければいけない。

【子供への防犯教育】

○ 子供自身が犯罪に遭わない力を育成するため、学校などで「地域安全マップづくり」の指導員として活動している。フィールドワークにより子供たちが通学路などを点検しながら、「入りやすく・見えにくい場所（危険な場所)」、「入りにくく・見えやすい場所（安全な場所)」を探し、なぜ危険なのか、安全なのかを子供自身が考えるお手伝いをしている。

【学校との連携】

○ ２年前からお誕生会給食を始めた。各町会から２名ずつ参加し、１年生から６年生の子供達と一緒に学校給食を食べる。一緒に食事し、話をすることで顔見知りになる。
○ 学校を核として地域づくりに取り組んでいる。学校から信頼を受けるとＰＴＡとも連携できる。今では学校行事があると各町会に声をかけ、喜んで協力してもらっている。他の町会長などとも仲良くなった。そうした絆は７年になる。

【その他】

○ 学校を中心とした地域に、町会、ＰＴＡ、商店街などと連携して防犯カメラを６カ所付けた。設置後は、この地区でほとんど犯罪が発生していない。防犯カメラを付けた効果が出ている。
○ ７年前に警察署から放置自転車の警告札をもらい放置自転車対策に取り組んでいる。
○「子供 110 番の家」への“駆け込み体験”や年末にはＰＴＡとの協働での子供防犯環境パトロールなども行っている。

目 標

○ ～一人の 100 歩より 100 人の一歩を目指して～
大人も子供も地域社会の一員である。お互いを尊重し、生活や社会のことをともに考え行動し多くの仲間を育てたい。また、これまでの活動で垣根が外れた３町会とＰＴＡ・学校が連携し、子供達の笑顔とあいさつが響くまちにしたい。
○ 公園周囲の「子供 110 番の家」を増やし、地域から放置ゴミが消え、緑豊かな環境の良い安全で安心できる住みよいまちにしたい。これからも、“大人が環境を育て、環境が子供を育てる”をモットーに、安全・安心なまちづくりに取り組んで行く。

2 SVS（成城警察署管内大学防犯ボランティア）

プロフィール

●名　称：ＳＶＳ（Student Volunteers of Seijo Police）
●設　立：平成 23 年 9 月 19 日
●構　成：成城警察署の管内にある日本大学、日本女子体育大学、成城大学の学生有志によるボランティア（平成 24 年 12 月末現在、213 名）※個人ごとの登録
●設立経緯：平成 23 年春の警察署協議会において、委員の方から「管内の犯罪防止のため、若い人に防犯ボランティア活動への参加を促してみては。」との提案を受け、大学生ボランティアを募集、設立に至る。
●活動内容：振り込め詐欺をはじめとする犯罪抑止に向けた啓発活動
（例）・　振り込め詐欺防止キャンペーンへの参加（偶数月の年金支給日）
・　地域パトロールへの参加
●活動頻度：不定期（月に 1･2 回程度）
●感謝状制度：10 回活動に参加すると、成城警察署から感謝状が授与される。

廣澤さん（日本大学文理学部４年）
青木さん（日本大学文理学部３年）

ボランティア活動に参加したきっかけ

○ 大学の公務員講座で成城警察署が防犯ボランティアの募集を行っていることを知った。警察官を目指していたこともあり、気軽に参加してみようと思った。
○ 成城警察署管内に住んでいるので、地元をもっと知るために防犯パトロール等をやりたいと思った。

活動費

○ パトロール等に必要なチョッキや合図灯などは、その都度、警察署から貸与されるので活動費は不要。

取組状況

【チラシの配布】

○ 振り込め詐欺防止のチラシを配るとき、最初に「成城警察署のボランティアです。」と名乗ると受け取ってもらいやすい。

○ 子供への声かけは親が警戒するので、まず親に声かけをするなどの工夫が必要。
○ 警察から貸与されるチョッキを着ていると警察官に間違えられ、道を尋ねられることもある。
○ チラシ配布に当たっては、しっかりキャンペーンの趣旨を理解していないと、相手にそのことを伝えられない。
○ チラシなどを配布するときに、相手と話をするといろいろな情報を聞くことができる。
○ 成城警察署が被害状況や犯人逮捕などの情報を教えてくれるので、チラシを渡すとき、そうした実例を話すと真剣に話を聞いてくれる。

【感謝状制度】

○ 10回参加すると感謝状をもらえ、履歴書にボランティア活動の実績（地域活動に貢献）を書くことができる。
○ こうした感謝状制度は、ボランティア活動に参加するきっかけとしては良いと思うし、インセンティブとなる。
○ 感謝状や履修単位がもらえるから参加するのではなく、ボランティア活動の趣旨に賛同して学生自らが積極的に参加してほしい。
○ 10回参加して感謝状をもらう頃がボランティア活動に慣れてくる時期で、15回位参加するといろいろな人と話ができるようになる。まだまだ振り込め詐欺等の被害が出ているので、さらに活動したい。
○ さらにボランティア活動を継続するためのインセンティブとして、20回参加で顕彰バッジの授与も考えられる。ただし、ボランティアにはインセンティブなど要らないという考え方もある。

【ボランティア活動への参加】

○ 公務員志望の学生は、年明けから試験勉強のため参加できない人が増える。
○ 日本大学では、３年生で公務員講座を履修するので、２年生までの参加が得られない。講座以外でも活動を紹介すると意欲のある１・２年生が参加するかもしれない。
○ 遠方から通学している学生が、講義のない日にボランティア活動をするのはきつい。
○ 同じ学年でもあまり交流がない。同学年で交流すれば就職の話で盛り上がることもある。パトロールのときなど二人一組の活動もある。
○ 就職課などに（ボランティア募集の）ポスターを貼れば１、２年生へも周知できる。
○ 東京オリンピック招致に絡め、「招致のためのまちづくりに貢献しませんか。」とのうたい文句を付ければ、自分もやってみたいと思う学生もいるのではないか。

○ 今後は、ボランティアに熱心でない学生にも積極的に声をかけて頑張りたい。
○ 就職活動の面接時にも、学生時代に取り組んできたボランティア活動がアピールポイントになる。就職難の時期に人と違うことに取り組むと、長所としてアピールできることをＳＶＳの新たな魅力にしてはどうか。
○ 若い人は１日の大半を過ごす大学がある地域を自分には関係ないと思っている。地域の町会や自治会等と接点を持ってはどうか。

【他大学の学生との交流】

○ 他大学の学生とも交流したいが、何の情報も持たないまま意見交換をしても重たい空気になるので、一緒に活動した後に交流会をしたい。
○ ＳＶＳの学生全員が集まって話す機会がない。年に何回か警察署に集まり、情報交換するだけでも輪が広がる。学生目線の提案もできる。
○ 現在は個々の集まりとなっていて、全体がまとまることはない。まとめ役がいた方がより良い取組ができる。

【その他】

○「ピーポくん」のプリントがあると安心する人もいる。

ボランティア活動に参加して思うこと

○ チラシ配りをしているとき、「（この情報を）ほかの人にも伝えるね。」と言ってもらえると、広報活動としては成功だろうと感じた。
○ キャンペーン活動で配布した「ひったくり防止カバー」が自転車に取り付けられていると、自分達がやってきたことが目に見え、役に立っているという実感が湧く。
○ 防犯活動を通して自分の地域のことがわかると、さらに防犯意識が高まる。
○ ＳＶＳに参加して、たくさんの町会の人が活動していることがわかった。それを知るだけでも全然違う。
○ 活動のきっかけは感謝状でも、活動をしたり、人の話を聞くことで認識が変わる。やりがいもでてくる。
○ 若い人は自分のおばあちゃん、おじいちゃん以外、お年寄りと話す機会は非常に少ない。ボランティア活動を通じていろいろな年代の人と話せるのは大きなメリットで、社会に出た時に大変役立つ。そういう面をアピールすれば良いのではないか。いろいろな年代の方と話をすると、価値観や意識なども変わる。

失敗したなと思ったこと

○ 声をかけやすい人とかけにくい人がいるが、声をかけにくい人の所に行くのは、やはり気が引けると思ってしまう。
○ 自転車利用のマナーを知ってもらうためのビラ配りをしたとき、駐車違反の取締りと間違われ、「私の何がいけないんですか。」といきなり怒鳴られた。
○ 笑顔で行うようにしているが、挨拶しただけでも構えられてしまうことがある。
○ 夕方の駅前で急いでいる人にもビラ配りをして、怒られたことが何回もあった。

3 麻布地区の生活安全と環境を守る協議会委員

プロフィール

●名　称：麻布地区の生活安全と環境を守る協議会委員
●設　置：平成 16 年 4 月 1 日
●設立経緯：港区の「安全で安心できる港区にする条例」第11条に基づき、地域における生活安全活動を推進するため、総合支所を単位として 5 地区に協議会が設置された。
●組　織：協議会に 2 分科会を設置
①生活安全分科会（自転車・自動二輪車対策、公園・道路の安全対策）
②環境美化分科会（落書き・ピンクチラシ対策キャンペーン、タバコルールキャンペーン）
総数 100 名以上（所属団体：区・警察・消防・六本木町会など 83 団体）
●定期的な防犯活動
1) 麻布地区の生活安全と環境を守る協議会及び分科会の開催並びに地域活動
2) 六本木をきれいにする会（平成 8 年 10 月結成）
①活動内容：清掃活動
②活動頻度：毎週金曜日　20:00 から 1 時間程度
③活動時期：通年
④参加者：100 名以上／回
3) 六本木安全安心パトロール隊（平成 16 年 12 月結成）
①活動内容：パトロール
②活動頻度：朝パトロール（隔週金曜日　07:30 から 1 時間程度）
夜パトロール（隔週木曜日　19:00 から 1 時間程度）
毎月 1 回水曜日　20:00 から 1 時間程度
③活動時期：通年
④参加者：朝パトロール　15 名程度／回
夜パトロール　30 名程度／回
毎月 1 回水曜日　30 名程度／回
4) 児童見守り隊
登校時　07:30 から 1 時間程度　3 名
下校時（午後から夕方）人が通る時に見守り　1 名
5) 地域の特徴：六本木地区は、東京でも有数の繁華街であり、都内の他の地域とは異なる様相を呈している。

小林さん（麻布地区の生活安全と環境を守る協議会委員）

ボランティア活動に参加したきっかけ

○ 六本木地区で会社を起業したとき、「地域に根差した取組をして、周りから評価されないと駄目」とアドバイスをいただいた。そのような中、協議会の取組を紹介され、加入することとした。

○ 協議会には、「パトロール隊」や「まちをきれいにする」活動を行っている委員がいて、その活動に共鳴を受けたことから、積極的に参加するようになった。

活動費

○ 活動費は、行政からの助成金や寄付金で賄っている。助成金は用具、寄付金はお茶代に使っている。

【意　見】

○ 腕章や合図灯はタダではないため、無償のボランティアは継続が困難となるケースが多い。しかし、すべて行政の予算で活動するのであればボランティアは必要ない。行政は、地域のニーズに応える支援や補助制度などを整えて、参加者の増加に努めてほしい。

取組状況

【防犯パトロール】

○ 有数の繁華街を有する地域特性から、パトロール中のトラブルを想定し、警察官に同行を依頼している。

○ 六本木パトロール隊の見守り活動に、社員も３人程度参加している。朝７時から交差点に立ち、登校中の小学生が来ると一緒に学校まで歩いて送り届けている。中学生には声をかけるあいさつ運動を実施している。

【環境美化分科会の活動】

○ 活動に必要な物品は行政から支給を受け、落書き消しやゴミ拾い、違法駐輪の取締り、打ち水作戦などを行っている。

【放置自転車対策】

○ 区内に新たな放置自転車の集積所ができたことから、条例による撤去が可能となった。撤去のための手続きとして、区の指導のもと警告札を付ける活動をしている。

【行政や警察との連携】

○ 協議会には、住民や企業、警察・消防、道路管理者などの行政担当者も出席する。警察や消防などへの質問も即答できるものはその場で答えてもらっている。また、答えられないものも持ち帰り、次回必ず報告される。このように協議会を通じて警察や消防などともコミュニケーションが図られている。

○ 以前、警察署が音頭をとり、ボランティアと交番勤務の警察官とのコミュニケーションが深められるよう「ランチミーティング（昼食会）」を設けられていた。
○ 交番勤務の警察官は「地域の顔」であるので、絆を深めた方が良い。六本木地区では地域の事情をよく知る警察官の協議会への参加協力が得られたことで連携が図られている。
○ 落書き消しやゴミ拾いには、警察署の少年柔剣道の子供達も参加している。

【防犯ステーション設置の夢】
○「明大前ピースメーカーズ」を見学したとき、「これだ。」と思った。地域住民の安全・安心まちづくりを実現するために、地域にはこのような場が必要と感じた。
○ 六本木地区における防犯や防災活動は、住民が少ないため在勤者が手伝って成り立っている。さまざまな行事があり、防災及び防犯、交通安全などの団体により取り組まれているので、活動拠点となるステーションを設けて交流できるようにするのが夢。
○ ステーションを設置し、例えば、「明日、交通安全行事があるよ。」と情報交換することで、防犯や防災の関係者も参加できるようになると良い。

【ボランティアの課題】
○ ボランティア活動を行う上で、２つの課題がある。１つはボランティア活動もそれなりの資金がないと長続きできない。自治体も全地域画一的ではなく地域別に濃淡を付けて、強化地区へは相応の補助をすべきではないか。２つ目は、ボランティアは非常に無責任な面がある。責任がないから、休んでもよいという人もいるのではないか。資金援助等条件が整えば無責任にならないと思う。
○ ボランティアとは自主的な活動であり、行政の施策に参画することをボランティアと呼ぶには違和感がある。
○ 六本木地区の場合、ボランティアというよりも行政の施策に、地域の企業が参加協力することが多い。

【行政との連携】
○ いろいろな活動に区民を参画させてくれる港区の取組姿勢はとても良い。
○ 港区の行政サービスはきめ細かく大変良くできているが、コミュニケーションづくりなどの地域活動を進めるためには、協議会にもっと権限と財源を与えれば良い。

【その他】
○ 保護者はこの地域の治安が非常に悪いと感じているので、子供を隣接地区の学校に行かせてしまう。
○ 参加者を増やすためには、資格制度や顕彰制度といった「生きがい」や「やりがい」を見出す仕組みづくりも必要。

4 亀戸二丁目団地管理組合自治会

プロフィール

●名　称：亀戸二丁目団地管理組合自治会
●設　立：平成 16 年（パトロール隊結成）
●設立経緯：東京都安全・安心まちづくりアカデミーを修了し、その内容を生かすために組織化した。江東区からの依頼により登下校時の子供見守り活動をスタート。
●メンバー：パトロール隊　約 60 名
●活動内容：居住地内パトロール／登・下校児童の安全パトロール／防犯・防災研修会の訓練／各種イベントでの防犯・ＰＲ活動／行政・警察のイベントに参加　等

小関さん（自治会会長）
植村さん（副会長）

活動開始のきっかけ・自治会の独立

○ ボランティア活動は、昭和 41 年の管理組合設立をきっかけとして開始した。この管理組合は、建物管理と自治活動の両方行っていたが、平成５年に理事会と自治会に分離した。自治会は外部の交渉窓口をはじめ、防犯パトロールやお祭りなどのイベントのボランティア活動を行っている。

○ パトロール隊は、これまで個別に見守り活動をしていたものを組織化し、役割分担や服装などを定めた。

活動費／資材の調達

○ 防犯活動の資金は、自治会費から充当している。資器材は、警察署や行政機関からの支援を受けている。

取組状況

【夜のパトロール】

○ 定例パトロールは、毎週金曜日の夜９時から 10 時頃まで、拍子木を打ち鳴らしながら防犯・防火を呼びかけている。５人１班でパトロール隊を編成しているが、自主参加する人も毎回いるので、あわせて常時 15 名前後の活動となっている。定期パトロール以外にも、不定期で自治委員や隊員が見回りをしている。

【見守り活動】

○ 子供の見守り活動は、「地域の方にも登下校の児童の防犯対策をお願いしたい。」という江東区からの依頼によりスタートした。我々パトロール隊員と保護者、シルバーが朝の７時半～８時半まで行っている。

○ 小学校では、学校があるときも毎日行い、幼稚園は始まる時間に合わせ、小学校の登校とは別に実施している。下校時も必要に応じて自転車を駆使して見守っている。

【お祭りを活用した防犯体制づくり】

○ 隣の自治会と共同で「ここがふるさと夏祭り」を開催している。この祭りを活用して絆づくりをしながら自治活動を推進している。

○ 祭りの時には、ネットワークを持つ10人の人が、それぞれ20人に声をかけ200人を動員する。これをサテライト方式と呼んでいる。こうした動員経験が、防犯・防災活動に役立つ。

○ 地域には3つの神社が鎮座されていて、それぞれの神社が上手に祭りを運営している。これらの祭りも大事な自治活動の一つで、地域の絆づくりに大いに役立っている。祭りを等しての「まちづくり」「生活安全づくり」は大事なイベントとなっている。

【防災活動】

○ できるだけ多くの人に、救急救命士や防災士の資格、あるいは介護の技術を取得してもらい、そうした人たちを防災活動のメンバーに登録して、災害時に役立てたい。

○ ＡＥＤも設置しており、講習会も行った。

○ 手押しポンプを利用した「女性の消火放水隊」も組織し、訓練を重ねている。

【参加者の拡大】

○ 団地の中で育ったので、「自分たちの団地は自分たちで守る。団地に恩返しをしたい。」と思うような人たちを増やしていきたい。新しい人にどんどん入って来てほしい。

○ 自治活動をやると若返る。生きがいと達成感が若さづくりになる。後期高齢期を迎えても、家の中だけで過ごさないで自治活動に携わり、絆づくりの大事さを知っていただきたい。

○ 高齢者も体調面や生活面等で参画者が減少の傾向にある。働き盛りに人も仕事と家事・育児で時間に追われている。何とか自発的な自治意識・絆づくりの機運を高めたい。

【学校や他の団体との連携】

○ 大学生のパトロール見学や、紫陽花祭りと称する植栽・文化祭における地域の町会や自治会の人々との交流を積極的に行っている。亀戸20町会の連合体では、防災・防犯に力を入れ、無線機を活用した防犯訓練等も行っている。また、他地域の団体では文京区のＳＹＭ（湯島の新花会・三組弥生会・三組町会の三町会からなる自主防災組織）と情報交流を図っている。

○ 地元の幼・小・中学校は、評議員活動・公開授業・道徳授業・文化祭・運動会等の行事に積極的に参加するほか、校長・生活指導の先生と父兄との懇談会等を行っている。

【子供の見守り活動】

○ 連合町会運動会では、少ない父兄で取り組み、とても苦労している。ボーイスカウト･ガールスカウト等の子供の団体を立ち上げたくても、子供をいろいろな地域から集めなくてはいけないので、隣接地域との連携・連帯が重要である。

○ 仕事をしている保護者は、昼間に学校の宿題を見ることができない。自治会で子供を集めて昔のような寺子屋的な塾(学校の施設を使って伸び伸びとした子供の遊び相手､文体サークル活動等）を開きたい。

○ 子供の遊び場として放課後の校庭を解放しているが、子供がケガをしたとき、誰が責任を持つのかが問題になっている。高齢者が見守ってはどうか。

【若者の育成】

○ 高校には青少年赤十字活動（ＪＲＣ活動）があり、これを地域の安全・安心活動に結びつけていきたい。大学生の場合は、ボランティア活動を取得単位として認めたり、地区での活動を卒業論文にして提出させてはどうか。

○ 学校教育は初等教育が大事である。幼稚園の頃から立ち止まってあいさつすることを体に教え込ませる。生活にしみ込んだ教育を徹底していただきたい。

【その他】

○ 私は東京都安全･安心まちづくりアカデミーの第１期卒業生であり、当時は、警察や消防、行政の安全・安心のスタッフの方々から「何か御用がありますか、どうですか。結果は。」等と声をかけられた。それで奮い立ちもしたし、励みともなった。

○ アカデミーは、大変内容のある大事な研修であったと同時に安全・安心の取組の動機づけとなり、現在の活動のベースとなっている。

5 NPO法人ささえ手

プロフィール

●名　称：ＮＰＯ法人ささえ手
●設　立：平成 22 年 1 月 20 日
●代　表：斉藤美和子
●会　員：約 50 名
●設立経緯：安全・安心なまちづくりを人任せではなく、自分達で動いて、何かあったときには支えられるような関係を作ってきたいと思い設立した。
●活動内容：・まちづくり事業
・セミナー・イベント事業
・地域交流事業
・広報活動事業
●活動頻度：毎日（事業へのかかわり方による）
●特　　徴：多忙な人も自分のペースで参加できる多彩な活動。元々ＰＴＡ活動をしていた人達と一緒に始めたので、ボランティア精神豊かな人達が集まった。

活動のきっかけ

○ ボランティア精神があっても、仕事や子育て、介護のために積極的に参加できない人は多い。そうした人達が地域活動に参加できる方法はないかと考え、活動を始めた。
○「感謝と感動の絆を！」をメインテーマに、老若男女あらゆる人たちが支えあい、楽しく元気に、地域をこれからも守り続けようと活動を始めた。

活動費

○ 主に会費や寄付で賄っている。
○ 行政機関等からの補助金等を活用する場合もある。

取組状況

【グリーンバルーンプロジェクト】

○ 会員の方にプランターを配付し、そこに花や野菜を植えてもらう。子供達の登下校時などに花や野菜に水をあげてもらい緑を育てながら子供達に意識を向けてもらうことで地域を守る意識啓発につなげていく。

【コミュニティ農園（ささえ手農園）】

○ 小学校の一角を借りて、野菜づくりを行っている。活動は、メールで連絡を取り合いながら月１回程度。この活動は、学校や地域との絆を深め、まちの緑化にも貢献する。

【キッズアートプロジェクト】

○ 子供達が作ったアートをプレートにして、近隣に配付している。

○ 子供達の言葉や芸術作品をまちに広げることで、地域の人が子供に関心を持ち、地域全体で見守りができるようにしている。住宅の壁面等に子供達の作品が飾られることで、防犯の効果も期待できる。商店街に子供達の作品が広がることで商店街の賑わいも期待でき、まち全体の活性化につながる。

○ 参加した子供達が、作品づくりを通して地域の安心を考えるきっかけづくりができるように働きかけている。

○ プレートが地域見守りのシンボルとなり、犯罪者を寄せ付けない安心なまちづくりに役立つ。

【その他】

○ 3.11 以降、防災にも力を入れており、連絡手段の勉強として、高齢者向けのインターネット講座を行っている。

参加者の拡大

○ コミュニケーションを重視している人は、さまざまな人脈がある。そのような人脈を活用して活動に引き込むことが重要である。

○ 新しく活動を始めた人が、ボランティアの気持ちを持続できるような、小さな楽しみを作っていくことで、活動が広がり、内容の充実につながる。

○ 人員の確保は大変。新しい人が入ってくれても、活動の趣旨について理解の相違が生じることもある。新しい人の意見も取り入れて、活動を活性化していく。

地域・行政・警察との連携

○ ボランティア活動を継続するのは大変である。町会とも連携したいが、町会があまり機能していない場合はできない。自治会や、公的に認められている団体と一般のＮＰＯ団体等が手を取って一緒にできると良い。

○ 行政から言われれば、人が集まりボランティアのようなものを作ることは比較的簡単である。しかし、そこから皆で勉強し、活動しようとすると、途中の段階で、かなり努力しないと続けられない。

○ 行政も勉強はさせてくれるが、警察や消防、役所は縦割になっているので、その後がうまくつながらないことが課題である。

今後の目標

○ プランターの配付数は現在約 100 個である。今後も趣旨に賛同してもらい、配付数を増やしていきたい。また、成果発表の場を増やして趣旨を広め、いろいろな団体にも真似をしていただきたい。

MEMO

当団体は、子育て等の理由でボランティア活動に参加できない人にも、参加できる活動を見出して提案している。具体的には、プランターを配付し子供の登下校時に花や野菜への水やりを促すグリーンバルーンプロジェクトや、小学校の用地を借りて野菜を植えるコミュニティ農園、子供のアートを街中に飾るキッズアートプロジェクトなどであり、これらは防犯活動にも役立っている。

ボランティアというと身構えたり、気遅れしてしまうこともあるが、気軽に参加できるのがこの活動の強みである。活動費も上手に補助金などを活用している。

課題は活動の充実と拡大である。今後は活動の趣旨をアピールすることで賛同者を増やすとともに、地元の警察や自治体をはじめ、町会や他のＮＰＯ法人との連携をどのように図っていくかが注目される。

6 地域友好会

プロフィール

●名　称：地域友好会
●設　立：平成 16 年 6 月
●代　表：赤羽忠明
●参加者：25 名
●設立経緯：東戸山小学校の校長から、ラジオ体操の指導員をしていた代表に防犯活動の依頼があり、友人・知人に声をかけて発足した。
●活動内容：防犯パトロール／自治会活動／警察行事への参加
●活動頻度：パトロールは水曜と金曜に 1 日 2 回。昼間は女性、夜は男性
●特　　徴：地域の安全・安心のパトロールを自主的に行っている。
無理のないペースで続ける地道な活動。

活動費

○ ボランティア終了後に、夏は「ビール」、冬は「焼き芋」や「肉まん」を自費で配ることがある。団体はボランティアであるため、交通費なども全額自己負担で行っているが、会員が少し休息できるような維持費が必要である。これが悩みとなっている。現在、運営費に対する補助の要望を出している。
○ 帽子やチョッキ、パトロール用ユニフォームなどの資器材に関しては支援してもらっているが、資金面での補助はない。ボランティアも、無償ではこれからはやっていけない。活動費に使えるような援助、報償がほしい。
○ 町会は自治会費が使えるが、ボランティアには資金補助がない。
○ 地域友好会は任意団体であり活動費は設けていない。

取組状況

【防犯パトロール】

○ 以前は、小学生中心の見守りと、ひったくり防止活動を月曜日から土曜日まで行っていたが、高齢者には無理をさせられないため、現在は水曜日と金曜日に絞っている。
○ 女性は夕方 4 時 30 分からパトロールを行い、男性が夜 9 時から 10 時までパトロールしている。巡回するメンバーは、昼間は最低 3 名、夜は 4 名以上で行っている。
○ 基本的には団地内のパトロールであり、夕方は小学校、幼稚園、保育園など児童や園児の下校コースを重点的に、夜は不審者が隠れやすい公園をはじめ路地や駐輪場などに目を配っている。

【防災活動】

○ 小学校を中心とした避難所運営会議の管理協議会に携わり、防災・防火活動を行っている。防災訓練を実施する際、地域に呼びかけ約 1,000 人参加してくれる。

○ 参加者の高齢化により、２時間半位の時間を要する訓練等のイベントは、疲れてしまうことから、活動時間を短くした。

【その他】

○ ラジオ体操第一にみんなで参加して顔見知りになり、地域の輪が広がりつつある。

参加者の拡大

○ ラジオ体操の指導のために立ち上げた団体のため、高齢者が多く、若い人は参加してくれない。一番の悩みは高齢化であり、さまざまな事情によりメンバーが減少しても補充するのが大変な状況にある。

○ 周辺高校の学生ボランティアは、社会福祉協議会を通じ、両親の了解や証明書があれば、いつでも受け入れている。彼らと一緒にパトロールを行うことも可能である。

防犯活動による変化

○ 日頃まちを歩いているときも「このあたりは危険だな。」とか「不審者が隠れやすそうだ。」といった目で見るようになった。また、大半のメンバーがシルバー世代であるが、ボランティア活動をすることにより、社会や地域とのつながりができたので、ほとんどのメンバーは「ある種の生きがいになっている。」と話している。

○ この地域に暮らす人の意識も変わってきた。パトロールを始めた頃は、例えば公園などで遅くまで遊んでいる子供に声をかけると、母親が走ってきて「変なオジサンに声かけられたと子供から報告がありましたが。」こちらが不審者扱いされたこともあった。最近ではパトロール以外でも「こんにちは。」「いつもご苦労さま。」などと言ってくれる。

○ 住民の防犯意識が高まったと同時に、昔ながらのご近所付き合いが少しずつ復活しているように思える。それが一番嬉しい。

防犯活動をやって思うこと

○ 防犯パトロールというと、「逮捕に協力した。」などという活躍が報じられることもあるが、実際は地味な活動の積み重ねである。団地内を歩いているだけという声も一部にはあるが、１日も休まずにやることがどんなに大変か、それが犯罪の抑止につながっているか考えてみてほしい。

○ ご近所の方から「毎晩ご苦労様」「おかげで夜も安心して歩けます」と声をかけられたり、子供たちがニコニコと安心して遊んでいる姿を見ていると、「防犯パトロールをやって、本当に良かった」と思える。

今後の目標

○ とにかく「継続は力なり」ではないが、１日も長くこの活動を続けていきたい。そして次の世代に上手くバトンタッチできればと思っている。そのためにも、団地内にある４つの自治会とも連携を図りながらやっていきたいと思っている。

MEMO

多くの団体が抱えるメンバーの高齢化に対応するため、パトロールの頻度を減らす、高校生ボランティアの受入体制を整えるなどの取組を行っている。また、任意団体のため公的補助が受けづらく、ボランティア活動の継続に向けた支援の必要性を問題提起している。

「１日も長くこの活動を続けたい。」という地道な防犯活動を行うことにより、住民の防犯意識も高まり、「毎晩ご苦労様。」「おかげで夜も安心して歩けます。」と温かい声をかけていただくことがシルバー世代にとっての生きがいとなっている。

今後はどのようにして、次の世代にバトンタッチしていくかが注目される。

7 東村山警察署管内防犯協会及び防犯活動機動部会

プロフィール

●団体名　：東村山警察署管内防犯協会及び防犯活動機動部会
●設　　立：東村山警察署管内防犯協会…昭和 40 年
　　防犯活動機動部会……平成元年
●会　　長：豊田治樹（両団体とも）
●参加人数：東村山警察署管内防犯協会…156 名（防犯活動推進員含む）
　　防犯活動機動部会……23 名
●設立母体：東村山警察署管内防犯協会…東村山防犯協会・清瀬市防犯協会
　　防犯活動機動部会……青パト運行ボランティアなど機動的に活動できる役員・委員
●設立経緯：東村山警察署管内防犯協会…東村山警察署開設時に設立された。
　　防犯活動機動部会……各種防犯活動を企画・実施し、東村山署管内における状況に応じた素早い防犯活動が有用であることから設立された。
●活動内容：徒歩および車両によるマイク広報および防犯パトロール、侵入窃盗被害防止・振り込め詐欺、還付金詐欺被害防止のマイク広報・犯罪被害防止広報誌配布
●活動頻度：毎日
●特　　徴：機動的活動

防犯活動機動部会活動のきっかけ

○ 防犯広報の拡充および活動の活性化
○ 地域住民との連携による犯罪発生の抑止

活動費

○ 東村山警察署管内防犯協会
　・東村山市・清瀬市の双方からそれぞれの防犯協会に交付された助成金の一部
　・各職域防犯協力会からの協力金など。
○ 防犯活動機動部会
　・会費 1,000 円（年額）および有志の寄付等を活動運営資金に充当している。
　・防犯グッズおよび犯罪抑止啓発看板等は管内防犯協会より提供

団体の概要

○ 東村山警察署管内防犯協会は、東村山市と清瀬市の両市民で構成される協会であり、電話やファックス、ネットで連絡を取り合いながら活動している。

○ 平成元年に、防犯協会の傘下に防犯活動機動部会を立ち上げ、ＰＴＡや地域の方々に参加していただき、パトロールやポスティング、駅前のビラ配りを行っている。

取組状況

【青パトによる防犯パトロール】

○ 防犯広報車の更新を東村山防犯協会に要請し総会で議決。青パト第１号車(パトカー仕様）が導入された。

○ 一番力を入れているのは、子供見守り隊の活動であり、現在は当番制で 13 台の青パトで登下校時にパトロールを実施している。

○ 朝は８時から、午後は２時から、通学路を中心にパトロールを行っている。
朝は、出勤前の活動であるが、楽しんでやっているので、つらいとは思わない。

○ ２人１組のパトロールは、隊員に都合のよい日をあらかじめ聞いておいて、うまく活動できるようにしている。

○ 青パトのスピーカーで、「怪しい人を見たらすぐに 110 番をお願いします。」と呼びかけている。不審者は警察がいう挙動不審者ではなく、「おやっ」と思う人。高齢者の迷人、泥酔状態の寝込み、交通事故などは、躊躇しないで 110 番している。

○ パトロールや広報で一番大事なのは住民に不安を抱かせないこと。むしろ安心を提供する姿である。

【自転車による防犯パトロール】

○ 防犯活動機動部会では、防犯パトロール用の電動アシスト付き自転車２台と中古自転車を購入し､前カゴに｢防犯パトロール 110 番｣と記載したカバーを取り付けた。防犯協会会員、元ＰＴＡ役員などのメンバーで、買い物に出かける時など、できる時に自転車パトロールをやっていただいている。

【その他】

○ 振り込め詐欺、還付金詐欺の被害防止を呼びかけている。

○ 代表が勤務している病院内に「東村山警察署ホームページ」というお知らせコーナーを設け、来院者に見てもらっている。

地域・行政・警察との連携

○ 行政や警察署を訪問してお互いに情報交換することが大切である。懇談の中にも数多くのヒントがある。

○ 行政や警察署などには人事異動があるため、その都度、活動の現状等を報告し、積極的に人の輪を広げていくよう努めている。

○ 各自治体には安全・安心まちづくり条例に基づいて、安全・安心まちづくり連絡会議が設置されている。その中で、警察署・消防署・教育委員会・保健所・防犯協会・交通安全協会・小・中Ｐ連・商工会議所が一体となって意見交換を行っている。

○ 警察署からは安全・安心まちづくりのためにタイムリーな情報をいただけるので、その時間帯などに合わせて活動することができている。今後もそれぞれの立場や役割でできることを積極的にやっていく。

ボランティア活動に参加して思うこと

○ さまざまな問題が起きても、継続していくことが大切である。それを実現するためには一人ひとりのボランティアがリーダー・オブ・リーダーとなり学ぶことが重要である。リーダー・オブ・リーダーにはやり過ぎるということはない。

MEMO

侵入窃盗や振り込め詐欺の防止のほか、子供見守り活動にも力を入れ、自転車や13台の青パトを活用したパトロールを登下校時に行っている。また警察署と上手に連携することで、警察署からタイムリーな情報をもらい、活動に役立てている。

そのコツとしては、行政や警察署へマメに足を運び、顔見知りになる、活動報告を行い情報交換をする、人の輪を広げることが重要と提言している。

また継続的に防犯活動を行うためには、メンバーの一人ひとりがリーダー・オブ・リーダーになるための取組が必要であるとしており、今後とも行政や警察などと連携した幅広い活動の実施に向け、どのように取り組まれていくかが注目される。

8 明星大学・防犯ボランティアチーム「MCAT」

プロフィール

●名　　称：明星大学・防犯ボランティアチーム（通称「ＭＣＡＴ」エムキャット）
「MEISEI COMMUNITY ACTION TEAM」の略で、「COMMUNITY ACTION」は「地域のために 活動する」という意味
●設　　立：平成 22 年 6 月 30 日
●構　　成：明星大学の学生有志によるボランティア 50 名
●設立経緯：平成 6 年当時、警察署の方から「防犯活動に若い力がほしい」との要請があり、（当時）学長と学生部長がボランティア活動に非常に熱心であったことから、学生による防犯ボランティアチームを結成した。平成 17 年まで継続していたが、諸事情により一時活動を休止していた。平成 22 年に再結成し活動を復活した。
●活動内容：住宅街の防犯パトロール、ゴミ拾い、高齢者宅訪問、下校時の児童の見守り、震災に伴う義援金の募金、振り込め詐欺防止をはじめとする犯罪抑止に向けた啓発等、地域のための活動であれば何でも引き受ける。
●活動頻度：週 3 回、午後 1 時から概ね 1 時間地元住宅街の防犯パトロールを行う。
週 1 回、小学生の下校時に児童見守り活動を行う。
（基本的には授業の合間を縫って実施）
●特　　徴：警察や行政と連携し、多岐にわたる活動を行っている。

活動費

○ 複数の助成金に応募し、交付された資金を活動費に充てている。

取組状況

【地域貢献】

○ 警察署や市役所、防犯協会などと協力しながら、明るいまちづくりに日々貢献している。
○ 常時活動しているのは、30 人程度。授業の空き時間に大学周辺の住宅をパトロールしている。そのときパトロールするだけではもったいないので、ゴミ拾いもしている。それを見たお年寄りがそばに寄ってきて、学生にいろいろな話をしてもらえる。このような場面は、学生にとって地域とつながっている実感が湧く貴重な時間だと思う。
○ 半分以上の学生は日野市在住。活動することで日野市を好きになり、もっと地域のために貢献しようと考える。お年寄りから褒めてもらうことは、若者にとって最大の喜びであり、モチベーションとなっている。

○ 老人会の人達とも一緒に活動し、あいさつやいろいろな話をする。住宅街をパトロールしていると声をかけてくれる人もいて、やはり感謝されるとやりがいを感じる。
○ 大学近くの小学校の下校時間にあわせて声かけ運動もしている。学生の提案を校長や副校長に伝えたところ快く承諾していただき、学校からも喜ばれている。
○ 正門から出てきた子供とのハイタッチや、子供が拾ったドングリをプレゼントされたりすることは、学生にとってとても新鮮で楽しんでいる。

【行政・警察との連携】

○ ボランティアセンターの呼びかけに、地域が応えてくれたので、それをきっかけに活動の輪が広がり、市内のあらゆる活動に参加している。
○ 振り込め詐欺防止、ひったくり・万引き撲滅運動、交通安全運動などの警察署主催のいろいろな活動にすべて参加している。
○ 行政とは、防災安全課、環境保全課、まちづくり都市計画課、社会福祉協議会などと多岐にわたって連携している。また、活動を通して商工会や観光協会の方々と知り合ったことで、さまざまな行事に参加させていただいている。
○ 警視庁の推薦を受け、防犯ボランティアフォーラムに出場。日頃の成果について発表した。
○ 最近では、中学生や高校生を活動に組み入れている。中学校や高校の社会科科目「体験授業」などの機会に参加を呼びかけると、生徒を参加させてくれる学校もある。それぞれの校長先生にこの話をすれば賛同が得られるのではないか。

【団体の運営】

○ 私はＭＣＡＴの顧問であり、ＭＣＡＴには学生のリーダーがいる。リーダーに任せると学生は結構動いてくれる。月１回定例のミーティングをしているが、学生は毎日のように集まって何かやっている。
○ 気軽に立ち寄れるボランティアセンターを居場所として、学生同士の交流の場ができている。現在も活動を積極的にアピールしながら人員を募っているが、ボランティア募集や活動日などの周知はほとんどメールで行っている。
○ 活動参加希望者には防犯講習会の受講後、活動体験をさせている。
○ ユニフォームは、警察庁から貸与された赤色ベストで統一している。学生は、防犯パトロール・警察庁と入っている装備品で活動することを大変誇りに思っている。
○ パトロールは防犯に力を入れており、防災関係は道路の陥没や土砂崩れをチェックする程度である。

活動を通して学生に思うこと

○ 学生の自主性が身につき、思いやりの精神が養われている。学生活動に誇りを持っている。
○ 東日本大震災以降、ボランティア意識は強まってきている。何か人のためになることをしたいという学生が多く、学生達のそのような気持ちに応えてあげなくてはならない。東北三県の被災地における瓦礫の撤去作業でなくても、一番身近な所（地域）で人のためになる活動があることを教えてあげられて良かった。

○ 東京都子供見守りボランティアリーダー育成講座に、本学生が複数参加している。熱心な学生に恵まれている。

今後の目標

○ これまでの取組は「受け身」的だったが、今後は「積極的」に地域に出ていきたい。
○ 新たにやりたいことは、地域の子供会などと一緒に活動すること。

MEMO

大学がボランティアセンターという学生の居場所を設け、学生同士の交流、さらには行政や警察との円滑な連携を図り活動していることが大きな特色である。

学生から地域の小学校に働きかけ、声かけ運動を展開するほか、警察や自治体等の防犯活動にもすべて参加している。また地域のお年寄りから褒められることで学生のモチベーションを上げ、更に活動を活性化させるなどの相乗効果も生み出している。

学生のボランティアに対する意識も高く、自主性の向上、精神面の成長に一役買っている。

今後は受け身の姿勢ではなく積極的に地域へ出て、子供会や中学生、高校生との活動も視野に入れた若者らしい取組がどのように展開されていくかが注目される。

第4 運営委員からのメッセージ

～プラス防犯をキーワードとしたまちづくりに向けて～

独立行政法人建築研究所 主任研究員
樋野　公宏

このワークショップのタイトルは「いいなぁ安心まちづくりワークショップ」です。「まちづくり」という言葉は、かなり一般的かつ広い意味で使われるようになりましたが、日本建築学会の書籍では以下のように定義されています。

> ***地域社会に存在する資源を基礎として、多様な主体が連携・協力して、身近な居住環境を漸進的に改善し、まちの活力と魅力を高め、生活の質の向上を実現するための一連の持続的な活動***
> *（日本建築学会編「まちづくりの方法」丸善、2004 年）*

ここで私がキーワードだと考えるのは、「多様な主体が連携・協力」、「生活の質の向上を実現するため」という２つの部分です。以下、それぞれのキーワードを切り口に、今回のワークショップの意義について考察します。

■多様な主体が連携・協力　～担い手に着目して

＜活動の評価基準＞

近年、防犯ボランティアによる自主防犯活動の活発化は目を見張るものがあります。警察庁の統計によると、2011 年末時点で防犯ボランティアは約 270 万人であり、この数字は、日本の国民の 47 人に 1 人に相当します。

しかし、これら全ての自主防犯活動が順風満帆というわけではありません。むしろ、大半の団体が課題を抱え、活動の継続に難しさを感じていると思われます。課題としては、「参加層が限られる」「特定の個人の負担が過大」「他団体と連携できない」などがよく挙げられます。

こうした団体に対して、私は、自らの活動を次の３つの評価基準で振り返ることを勧めています。１つ目は「やるべきか？」です。地域に活動の必要性（ニーズ）があり、実際に安全･安心に貢献できているかどうか振り返ってみてください。２つ目は「やれるか？」です。いくら活動の必要性が高くても、自分たちの持つ資源（ヒト、モノ、カネ、情報）の範囲を超えるような活動は長続きしません。

３つ目は「やりたいか？」です。リーダーは人一倍の使命感を持って活動しますが、リーダー以外のメンバーがやりがいを感じていることが重要です。今回のワークショップで、「防犯活動に参加すると、地域が安全になるばかりか、自分が健康になるし、地域にも顔が広がる。退職を控えた方々にそう言って勧めている」という発言を伺いました。防犯ボランティア活動を、自己実現の場として感じてもらえるような仕掛けが必要です。

＜二大勢力の連携＞

別の統計（平成 23 年社会生活基本調査）を使って、性別、年齢別に「安全な生活のための活動」の行動者率（行動者数 ÷ 属性別の人口 ×100%）を表したのが図 1 です。女性は 40 ～ 44 歳で行動者率がピーク（9.5%）に達します。これは小学生を持つ母親がＰＴＡ活動として見守りを行っているものと考えられます。一方、男性は 70 ～ 74 歳で行動者率がピーク（10.2%）に達します。これは退職後のサラリーマンが地域に回帰して、自治会や町内会の防犯パトロールなどに参加しているものと考えられます。

しかし、この二大勢力（町会・自治会等を母体とする団体と、ＰＴＡ・学校を母体とする団体）の連携する事

例は少ないようです。そこで両者が連携する可能性を探るため、東京都が実施した「防犯ボランティア団体・活動に関するアンケート調査」の結果を分析しました。両者の相違点の１つ目は、活動の動機です。活動内容は同様であっても、ＰＴＡ系が「子どもを犯罪から守ること」を動機にしているのに対し、町会系は「子どもの健やかな成長」という包括的な目的で活動していることが分かりました。

両者の相違点の２つ目は、団体が抱える課題です。ＰＴＡ系は 36% の団体が「地域とのつながりがない」ことを課題に挙げました。一方、町会系は 83% が「活動メンバーの高齢化」、63% が「活動メンバーの確保」を挙げました。両者の連携を進めることで、町会系は若い世代のメンバー確保、ＰＴＡ系は地域とのつながりの構築といった課題解決に結びつく可能性があります。

両者の連携を進める上では、「地域ぐるみで子どもの健やかな成長を見守る」というビジョンが共有しやすいと考えられます。具体的には、（町会系が重視する）高齢者と子どものふれあい活動、（ＰＴＡ系が重視する）高齢者の経験を子どもの教育に活用する取り組みなどが接点になると考えられます。これは地域の高齢者の生き甲斐にもなり、世代間で「お互い様」の支え合いの関係を作ることにもなります。市区町村、学校区といったより身近な範囲で、今回のワークショップのような交流の場が望まれます。

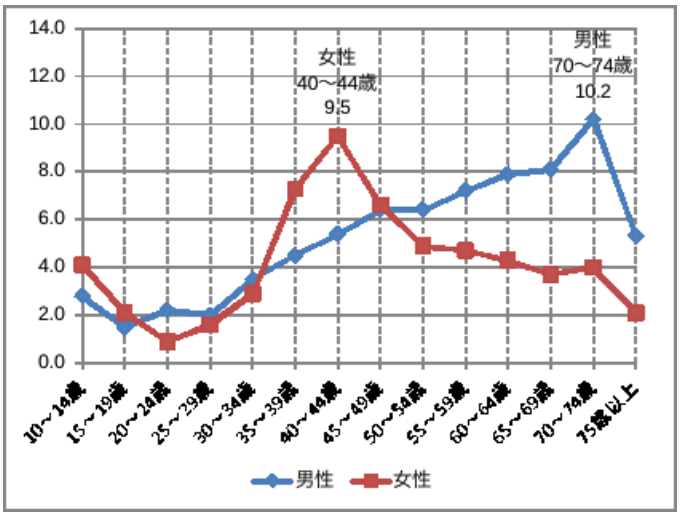

図１　「安全な生活のための活動」行動者率（%）
出典：平成 23 年社会生活基本調査（総務省）

＜学生・現役世代の参加＞

今回のワークショップで最も印象的だったのは、高校生、大学生といった若い世代の参加が多かったことです。「安全な生活のための活動」の行動者率を示した図１を見ると、男女ともこの年代が最も低くなっていますので、とても奇特な方々だと言えます。彼らは体力だけでなく柔軟な思考力が強みです。学生の参加がようやく本格的になったばかりの現時点では少ないかもしれませんが、学生の企画による、学生ならではの活動が増えてくることを期待しています。

さて、警察では、こうした大学生のほか、現役世代の参加促進に力を入れています。しかし、唐突に現役世代に参加を呼びかけても難しいと思います。おそらく、ワークショップに参加された先輩方の多くも、現役世代は地域を振り返ることは少なかったでしょうし、実際に「自分も会社勤めの 30 代、40 代の頃は、忙しくてこういう活動に参加できなかったよ」と、現役世代に同情する声もありました。

しかし、学生時代に地域活動に参加した経験があって、その必要性を知っているかどうかで、就職してからの地域への関わり方は大きく変わってくるはずです。ワークショップに参加した大学生からも「社会人になってもこういった活動に関わっていきたい」という発表がありました。そうした世代を地域の先輩方が支えるといった地域像が描けるはずです。

■生活の質の向上を実現する　～活動内容に着目して

＜防犯環境設計＞

防犯環境設計とは、犯罪が遂行される環境に着目し、犯罪が起こりにくい環境を作り出すことを目的とする考え方です。そこで重視される原則が図２に示す「自然監視性の確保」と「領域性の強化」です。「自然監視性の確保」とは、見通しや明るさの確保により、自然と人目が届く状況にあることを指します。「領域性の強化」は、領域（なわばり）を明示することで、物理的・心理的に犯罪者が接近しづらい状況を作ることを指します。これらの２つの原則に照らして有効な防犯活動が望まれます。

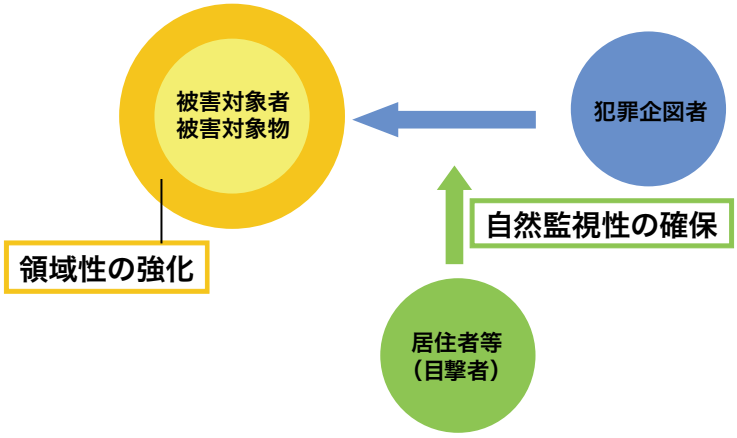

図２　自然監視性と領域性

＜防犯活動の多様化＞

一時期、ピッキングという侵入手段が流行ったのをご記憶かと思います。この背景には、高度成長期以降、コストや便利さを重視するあまり、どの建物でも同一形式のドア錠が取り付けられたことがあります。この錠前は泥棒に研究し尽くされ、侵入盗の急増という結果を招きました。今では「防犯性能の高い建物部品」（CP 部品）に認定される錠前が各メーカーで何種類も製造され、泥棒にとってはやりにくい状況になりました。

地域で行われる防犯活動も、それぞれの地域性を加味した多様な活動である方が、犯罪者にとって攻略しづらいと考えられます。そもそも、各地域状況の多様性を考えれば活動が多様であることは当然ですし、地域独自の活動であることは、担い手のやる気にもつながります。

今回のワークショップのように、各地域で防犯活動を行う人たちが集まる場は、互いの活動を自らの参考にするだけでなく、それぞれの活動の独自性を競い、刺激し合う場としても有効です。

＜プラス防犯＞

防犯活動を多様化するキーワードとして、私は「プラス防犯」を提案しています。

冒頭に「まちづくり」の定義を紹介しました。まちづくりのテーマは景観、環境、地域活性化など多岐にわたり、「防犯まちづくり」もそのひとつとして位置づけられます。強調して言うなら、防犯はまちづくりのひとつのテーマに過ぎず、総合的な視野を欠いて防犯だけを突き詰めても、必ずしも良いまちづくりは実現しないということです。

都が毎年実施している「都民生活に関する世論調査」によると、2004 年から 2010 年まで、都政への要望の第一位は７年連続で「治安対策」でした。しかし犯罪の減少や震災の影響で、この２年は「防災対策」「高齢者対策」が上位に来ています。こうした都民ニーズをかんがみて、前述した自主防犯活動の大きな人的資源を、他のテーマのまちづくりにもつなげることが重要だと考えています。

これは、もちろん防犯活動をやめろと言うことではありません。防犯と親和性の高い他のテーマを加味した活動に発展させることで、より多くの人が参加できますし、より生活の質が向上すると考えられます。このように、

防犯活動に他のテーマを加味すること、逆に、他のテーマの活動に防犯的な意味合いを持たせることが「プラス防犯」です。例えば、花づくりと一緒に子どもを見守る取り組み（環境美化＋防犯）（写真１）、通過交通を減らして地域の領域性を高める取り組み（交通安全＋防犯）、子どもを見守る高齢者を招いての食事会（高齢者福祉＋防犯）などが実際に行われています。

今回のワークショップでは、こうした「プラス防犯」のヒントが得られたのではないでしょうか。既に各地域で盛んに取り組まれている防犯を入り口に、様々なテーマにまちづくりが広がること、それによって地域の魅力と活力が高まり、そこでの生活の質が向上することを祈念しています。

写真１　花づくりと一緒に子どもを見守る「見守りフラワーポット大作戦」

参考文献
・「防犯活動から広がるまちづくり」（2012.10）
http://www.kenken.go.jp/japanese/research/hou/topics/bouhan/pdf/ristex.pdf からダウンロードできます。

～多様な人たちの参加によるまちづくりのススメ～

まちづくりコーディネーター
杉崎　和久

みなさまお疲れ様でした。最初にも話をしましたが、今回のワークショップは、各地で防犯まちづくり活動に実際に関わられている方同士が活動の中で抱えている課題や活動を通じて得られた経験を共有し、実際の活動をより良くするためのヒントとすることを目標としました。実際に参加してみていかがだったでしょうか。私からは、今回のワークショップに関して、２点コメントをしたいと思います。

■ワークショップの種明かし

まずは今回のワークショップの種明かしをしたいと思います。そもそもワークショップという手法は、性別や世代、価値観やライフスタイルなどが多様な人が対話するための手法として、まちづくりの現場ではよく使われるものです。ワークショップは、そこに集まった人たちの知恵や経験を共有し、それらを踏まえて共通の成果を作り上げていくことが多いです。そのための対話を行うために話し合いの単位(少人数のグループに分けるなど)、対話の順序・テーマ設定を、人前で自分の考えを表明しやすくするための道具（付箋紙など）の使用、議論の過程が見えるようにする（模造紙等の活用）などの工夫が行われます。今回のワークショップもこういったさまざまな工夫をしていますが、さらに今回のワークショップの目標に合わせていくつかの工夫をしました。

まずは、「参加者の関心を踏まえたテーマ設定をするため」に事前アンケートを行いました。参加者が一回のワークショップの限られた時間の中で実際の防犯まちづくり活動に役立つヒントを得るところまで対話を進めるために、テーマ設定はワークショップの中では行わず、事前に参加者に対するアンケート結果に基づいて行いました。それにより、参加者のグループ分けも関心テーマに対応して行うことができました。

次に、「より多くの人の経験を共有するため」にグループを固定せずに席替えを行いました。まちづくりにおけるワークショップでは、メンバーを固定したグループで対話や作業を行い、成果を作っていくことが一般的です。そして、このときのメンバーは性別、世代、テーマとの利害関係等が多様な人たちで構成するように配慮します。それにより生み出された成果は、一人であるいは、特定のグループによる成果よりも、多様な視点が織り込まれた創造的なものであることが期待されます。とはいえ、グループを固定していることから、一回のワークショップで、参加者が対話をするのは同じグループのメンバーに限られてしまいます。そこで、より多くの人たちの影響を受けながら、対話をするために、途中でメンバー交代をする企画にしました。グループや全体での成果をつくることを目的としていなかったために物足りなかった方もいらっしゃるかと思いますが、今回の成果は参加者一人一人の心の中に残った「気付き」なのです。ただ、「気付き」も多くの人と共有したいと思い、ワークショップの最後にシート記入していただきました。この報告書では、このとき記入された参加者のみなさんの気付きも掲載されています。是非ご覧下さい。

■学生ボランティアへの期待

次に、ワークショップの議論の中で気になった点についてコメントします。今回のワークショップは、たくさんの学生さんが参加しています。実際にこれだけの学生さんが、防犯まちづくりの活動に参加しているのは心強いことです。ただ、学生によるまちづくり活動には継続性に難があることを指摘しているグループがあり、少し気になりました。

確かに大学生の場合は、長くても４年間という期限があり、卒業後に多くの学生は就職等の事情で地域を離れてしまいます。確かにまちづくり活動で重要な継続性という観点からは相性が悪いと思うかも知れません。だからといって、学生がまちづくり活動に参加することを期待してはいけないのかという点が気になります。むしろ、

私は学生の力を活かせる地域になって欲しいと考えています。確かに大学生は、4年間という期限がありますが、（授業やバイトもありますが）比較的自由に動け、子供たちにとってお兄さん・お姉さん的な存在であり、若い彼らは力仕事にも役に立つ、ちょっとしたパソコン作業も教えてもらえる、専攻分野によっては専門的な知見も得ることができる・・・挙げたらキリがないくらいの可能性があります。地域の人たちの活動に不足しているものを補ってくれる可能性があります。

またそういった具体的なことだけでなく、学生が入れ替わるということを前向きに捉えると、毎年新人さんが入ってくるということでもあります。どうしてもメンバーが固定しがちなまちづくり活動の中で「今年はどんな子が来てくれるのだろうか？」という楽しみ方もあるのではないでしょうか。そのときどきの学生の得意技・性格などの個性が活動を刺激することになるかと思います。つまり、風を起こしてくれるということです。いずれにしても4年しかいない学生の活動に期待しないのではなく、それを承知で積極的に活かしていくという力も地域のまちづくり活動を継続させていくために効果的だと思います。

一方で学生さんは、長い間地域で活動をされている人の経験に圧倒されるかも知れませんが、そこは開き直って、自分の貢献できることを見つけて積極的に発言、行動をしてほしいと思います。学生だから見えること、自分だから役に立てることを見つけてください。そういう事が広がっていくと、後継者問題とか刺激、活動の展開が広がっていくのではないかと思いました。

このことは学生だけでなく、現役世代で地域の外に通勤している人や子育てまっただ中の方などまちづくり活動に参加するためには時間などの制限があるような人たちの力を防犯まちづくり活動に活かすためにも同じような感覚が必要かと思います。

まちづくりには「ヨソモノ・ワカモノ・バカモノ」が必要だとよく言われます。つまり、多様な人たちで構成された「まち」の中でまちづくり活動をするためには、同じようにそのまちづくり活動には多様な人たちが参加することが望ましく、かつ日常活動している人（「土」の人）だけでなく、「風」のように通り過ぎていく人が活動を刺激し、創造的にそして活性化する役割を担うことも多いです。

そして、そういった人たちが互いのことを理解し、力を合わせて活動していくきっかけとなる手法としてワークショップがあります。こういった手法も活かしながら、多様な人が得意技を用いて参加している、持続性のある防犯まちづくり活動をめざしてください。

第５ ワークショップを終えて ～運営委員感想～

東京都子供見守りボランティアリーダー育成講座修了者
斉藤　美和子

東京都が主催するワークショップということで、少し硬い感じをイメージして会場に入ったところ、テーブルクロスがピンクや黄色といったパステルカラーで明るく、最初の小出教授のあいさつもざっくばらんな内容で、まったく緊張もなく楽しい気持ちでスタートできました。

また、自己紹介を１分に区切って全体をまとめて進行するなど、進行もとても丁寧だと感じました。誰もが発言するよう促すルールを全体に説明してくださったのも、グループごとの話し合いの時に生かされて、大変良かったと思います。

私が参加したのは「行政や警察との連携」「活動内容の充実」の分科会ですが、どちらでも出てくるのが「人」の問題でした。後継者が育たない、せっかくつながったと思ったら担当が変わり引き継がれてない、トップが理解しないと何も始まらない、動ける人がいない。働いて税を納める世代、子育て、介護の世代に無理にボランティアをさせるわけにはいかない。学生に単位をあげてボランティアをさせようという意見もありましたが、子どもの貧困という言葉が知られ始めてお分かりのように、学費を稼がなくてはいけない学生も増え、ボランティアばかりしていられる時代ではなくなりつつあります。どの人たち、団体もこうした「人」の問題を抱え、ぎりぎりの中で活動していることがわかりましたが、これに関しては答えが出ませんでした。

「いいなぁ 安心」という街にしていくには、見守り、パトロールといった防犯の面はもちろんのこと、防災に関しても充実させていく必要があります。私たち一般市民としては警察と消防が一括りなのに対し、実際には管轄が違うことでなかなか連携を図れない場合があるのも、一般市民が少しボランティアしようかという気持ちにブレーキをかけさせてしまう、つまり面倒になってしまうことにつながっているとの意見もありました。

私は、学生もバイトしなくてはいけない、働き世代は税を納める、高齢者にパトロールは厳しい等々悲観的な要素がたくさん出ている中で、それならそうした状況でできることを生み出す必要があると切実に感じました。みんな忙しいけど、みんな安心できるまちに住みたい。一つの例として、花に水をやりながらの地域見守りなら、参加しやすいと提案しました。ＮＰＯ法人ささえ手が活動している内容です。

企画として面白かったのは、最後の意見をシェアするためのグループ分けが誕生月ごとだったことと、「いいなぁ 安心の樹」を作成したことです。７７歳の方と誕生月のことで盛り上がり、その後の話し合いも楽しめました。

今回のワークショップに参加し、自分の抱えている問題を話すことで明確化できたことや、他の方のお話から自分の活動に活かせるものを見つけられたことが大変有意義でした。エネルギーをいただき、頑張ろうという元気な気持ちが、今でも継続しています。

東京都安全・安心まちづくりアカデミー修了者
豊田　治樹

100 余名の参加者それぞれ皆が課題を持ち、イメージ論ではなく具体的に実践しておられる姿に敬意を持ち共感・共鳴できたことが、とてもうれしく感動いたしました。

ボランティアそれぞれが、エリアやチームにおける人間関係や社会性において、有効な活動が期待されているのではないかと思いました。

アンケートから抽出されたテーマは「シャッフル」により一層明確になり、それぞれの活動の地域的スキルと人間関係をより深めていく「絆」である。「敬意を持って互いを知り合い親しくなる」ことにおいて大成功だったと思います。

さらには自治体・警察署に足を運ばれ、行政との連携を密にされる意見交換等があればより一層の発展が期待されるのではないかと思いました。

主催者である東京都青少年・治安対策本部並びに小出先生はじめ樋野先生・杉崎先生に深く感謝申し上げます。